

はじめての
ハマカルアートプロジェクト

HAMA-CUL ////ART PROJECT

ハマカルアートプロジェクト2023 アーカイブ

First Hama-Cul Art Project Archive Documents

— Artist in Residence Program in 12 Municipalities of Fukushima

ハマカルアートプロジェクト2023

[凡例] 福島県12市町村で滞在制作をした芸術家名 | アーティスト・イン・レジデンス事業者名

藤本梨沙+清水康平 パフォーマンスユニットhumunus | 秋元菜々美

安芸早穂子 伊藤隆介 gwai 小原二三夫 春日井孝明 川口蓮 奥誠之 さとうゆか 山岡信貴 |

アートと考古学国際交流研究会実行委員会

川内有緒+三好大輔 | 株式会社植田印刷所

横田岳史 | エフエムしろいし

石上洋 的場真唯 | ガッチ株式会社

緒方彩乃 | 久留飛雄己

田島悠史 佐々木樹 | 経営芸術総合研究所

三塚新司 | テイントラボ

福田果歩 | 福島中央テレビ

板橋基之 | ベーシックシネマ

西尾佳那 野宮有姫 武井希美 渡邊塊 中澤ナオ 一般社団法人コロガロウ | MARBLiNG .Inc

開沼博 古川日出男 大森克己 | モダンシングス

タル・ペーラ 小田香 シュ・ジエン 飯塚陽美 リン・ポーユー 福永壮志 大浦美蘭 エシラギ・ロヤ 清水俊平

| フーリエフィルムズ

嶋田雄紀&大熊クラシック | リジョイス企画

本並びはアーティスト・イン・レジデンスのプログラムに取り組んだ事業者の50音順によるもの

ハマカルアートプロジェクトについて

ハマカルアートプロジェクトとは、2011年3月11日に起こった東日本大震災に伴う、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって避難指示等の対象となった福島県12市町村*の地域における芸術家やクリエイターの地域での滞在制作(アーティスト・イン・レジデンス)を中心に、住民との交流を含む取組や場づくり(アートプロジェクト)を実施する、さまざまな主体(企業や団体、個人等)に対して、支援を行うプログラムとして、令和5年(2023年)より開始しました。

復興および帰還が進む中、福島県、とりわけ12市町村には、数多くの芸術家やクリエイターが来訪し、地域での創作を通じた交流や移住等といった新たな共創の関係が萌芽しつつあります。

このような流れの中、12市町村での創作活動を求めるより多くの国内外の芸術家やクリエイターが滞在しながら地域との共創関係ができる環境づくりが、地元とりわけ地域のこれからを担う世代と、この地で活動する意思のある創り手の双方から求められています。

本プロジェクトは、国内外の人々と12市町村の人々が、さまざまな分野の創作を通じて関係できる環境づくりの基盤となる、アーティスト・イン・レジデンスのプログラムを主体的に企画、実施できる事業者による取り組みの地域での促進と定着を目的に、その活動の支援を実施するものです。

※福島県12市町村……田村市・南相馬市・川俣町・広野町・楡葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯館村



CONTENTS

ハマカルアートプロジェクト2023について ——— 1-2

プロジェクト アーティスト・イン・レジデンス 成果紹介 ——— 4-36

プロジェクトレビュー・論考

～作品評・地域アート・アートマネジメント・地元からの考察・文化経済 ——— 37-60

ヴィヴィアン佐藤・藤田直哉・菅野幸子・青木淑子・岡田智博

「福島県12市町村」

- 飯舘村
- 川俣町 ● 南相馬市
- 葛尾村
- 浪江町
- 双葉町
- 田村市 ● 大熊町
- 川内村 ● 富岡町
- 楢葉町
- 広野町

ハマカルアートプロジェクト2023

福島県

12市町村で2023年9月から2024年2月まで

14組のアートプロジェクトの担い手が

54名の芸術家たちと

16のプロジェクトによるアーティスト・イン・レジデンス(滞在制作)を実施

HamaCul Art Project 2023

12 municipalities in Fukushima

From September 2023 to February 2024

14 Groups of Art Project

With 54 Artists

Artist-in-Residence Program with 16 Projects

プロジェクト アーティスト・イン・ レジデンス 成果紹介

Works of Art Projects and Artist-in-Residence
of First HamaCul Art Project

解説テキスト:
ヴィヴィアン佐藤・岡田智博

提出期限
はあなた
の中で
約束、

仮設建築「記憶と未来が交錯する家」……避難指示解除後に撤去された家屋に人々が自由に集まることができる可搬型の「仮設建築」による「場」を創出し、不定期に開催する「家開き」イベントの開催を通じて、集まった人々がそれぞれ土地の記憶や文化などをどのように耕していけるか想いをはせた。

富岡町の肖像をえがくアートブックの制作……音声ガイドを聞きながら富岡町を巡る体験型の作品であるツアーパフォーマンス「うつほの壁」をもとに、「富岡町の肖像をえがくアートブックの制作」に取り組んでいく。

滞在制作期間：2023年11月～2024年2月



実施事業者：秋元菜々美（12市町村）

滞在制作地域：富岡町、大熊町

土地の時間をめぐる滞在制作。仮設建築「記憶と未来が交錯する家」の制作と、ツアーパフォーマンス「うつほの壁」を落とし込んだアートブックの制作。この地における環境と文化の相互関係の「土壌」をテーマにした、地域のプレイヤー、研究者や滞在アーティストとのフィールドワークやレクチャー、ワークショップの実施。

滞在制作芸術家と実施タイトル：

藤本梨沙＋清水康平[建築] | 仮設建築「記憶と未来が交錯する家」

写真①② 撮影：キヨスヨネスク

パフォーマンスユニットhumunus[演劇] | 富岡町の肖像をえがくアートブックの制作

写真③ 撮影：宇佐見采花 / 写真④ 撮影：秋元菜々美

アートに考古学的な視点を持ち込み、国指定史跡浦尻貝塚を中心に南相馬市の歴史に培われた文化遺産を持つ「みえないチカラ」に着目し、同貝塚のアウトリーチを続ける多分野のチームが、芸術家、地域の住民、専門の研究者との共創で制作したプロジェクト。縄文から現代までの南相馬の営みや環境を、専門家とともに地元住民や芸術家たちが考察しながら、さまざまな表現手法やバックグラウンドを持った芸術家が、多彩な作品を制作し、市内各所で公開した。 滞在制作期間:2023年11月~2024年2月



実施事業者: **アートと考古学国際交流研究会実行委員会** (大阪ほか全国)

滞在制作地域: **南相馬市**

国指定史跡浦尻貝塚を中心に、南相馬市の歴史に培われた文化遺産を持つ「みえないチカラ」を芸術家、地域住民、研究者との共創で表現。

滞在制作芸術家と実施タイトル:

安芸早穂子 伊藤隆介 gwai 小原二三夫 春日井孝明 川口蓮 奥誠之 さとうゆか 山岡信貴 [現代アート] | **Power of the Invisible -ともにみるみえないチカラ-**

写真① 伊藤隆介+ワークショップ参加者(小高地区)「炎と土は太古の映画だった」/

写真② 小原二三夫「つながる一手ざわりのランドスケープ」/ 写真③ gwai+小高の

みなさま+ワークショップに集まって景色のうろこを縫い付けたなかまたち『大悲山

大蛇伝説を追って』/ 写真④ さとうゆか「里山5千年ものがたり」/ 写真⑤ 奥誠之

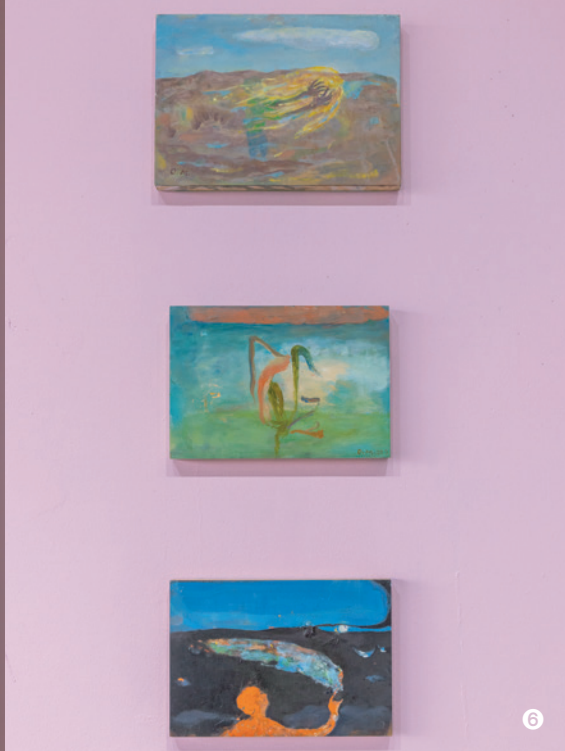
「書斎の絵 油彩 水彩」/ 写真⑥ 安芸早穂子「縄文の記録と記憶」/ 写真⑦ 山岡

信貴「アートと考古学国際交流研究会 ハマカル記録映像作品」/ 写真⑧ 川口蓮

「空飛ぶ縄文人」



2

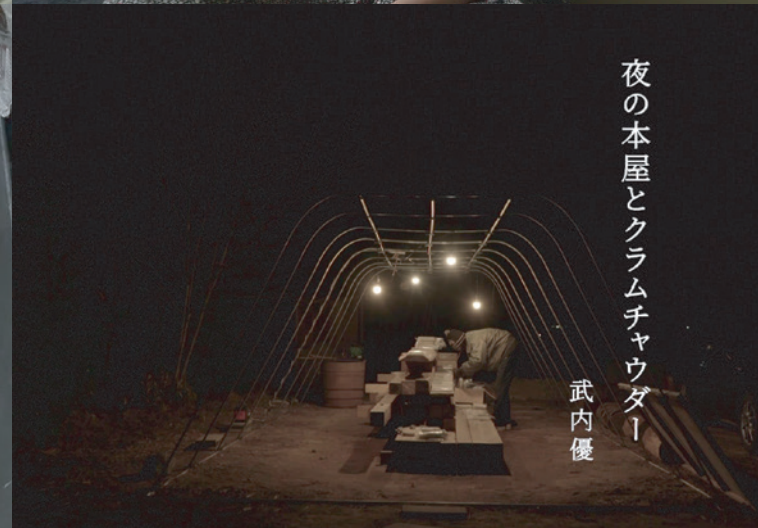


浜通りを貫く国道6号線沿いを舞台にした食のエッセイとドキュメンタリー「ロッコクキッチン」の制作。
住民たちが地元で料理をし、食し、日常をつぶやくという、国道の移動や食べた物の消化といった身体
の内外の距離と時間にまつわる誰もが生きていく上では避けては通れない「食」をテーマとした作品。

滞在制作期間:2023年12月~2024年2月



明日、彼は横を向き、またチャイを頼むだろう

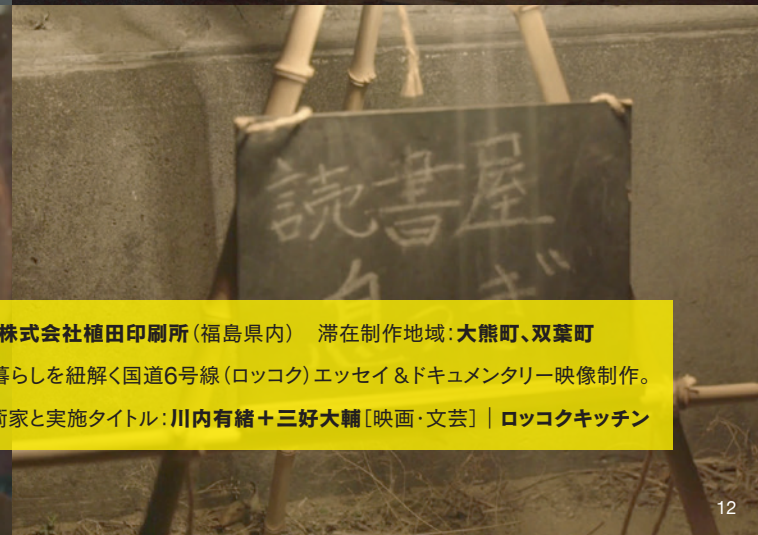


夜の本屋とクラムチャウダー

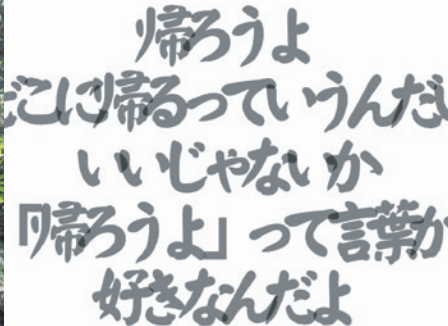
武内優



大熊町



実施事業者:株式会社植田印刷所(福島県内) 滞在制作地域:大熊町、双葉町
食を通じて、暮らしを紐解く国道6号線(ロッコク)エッセイ&ドキュメンタリー映像制作。
滞在制作芸術家と実施タイトル:川内有緒+三好大輔[映画・文芸] | ロッコクキッチン



Voice Drama: FUKUSHIMA
Aftermath of the 2011 JAPAN Earthquake and Tsunami
Filming YOKOTA TAKASHI
Music NOBODY HURTS

札幌のコミュニティFM局のチームが、12市町村各地に何度も足を運び、対話を通じた関係を深めながら、つながった人々と制作したヴォイスドラマ。ラジオコンテンツとして配信を行なった。

滞在制作期間：2023年12月～2024年2月



実施事業者：エフエムしろいし（札幌） 滞在制作地域：南相馬市、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町
福島で50人以上の方々とお話をしたなかで見えてきたテーマ「ふるさと」。そのうち7人から託された台本のない物語をラジオドラマとして紹介。
滞在制作芸術家と実施タイトル：横田岳史[ボイスドラマ] | Snow Flower ～ひとつ終わり ひとつ始まる～





被災にあった伝統的工芸品の施設を滞在制作や企画展示の場としての再興を試みるプログラム。震災の記憶を場として留めながら、持続的な芸術や文化の制作や展示の場としての再生に取り組む続ける。

滞在制作期間：2023年12月～2024年2月

実施事業者：ガッチ株式会社（12市町村） 滞在制作地域：浪江町

伝統ある窯の店舗をアーティスト・イン・レジデンス拠点として復活させる。

滞在制作芸術家と実施タイトル：

石上洋 的場真唯[現代アート] | 大堀相馬焼松永窯震災遺構型AIRプロジェクト

写真① 石上洋「記憶のアンカー」/ 写真② 的場真唯「Point N」



②

実施事業者:久留飛雄己(12市町村)

滞在制作地域:南相馬市、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、飯館村、葛尾村

滞在做る拠点やスペースをリサーチし、芸術家が地域で創作や交流ができるきっかけになる冊子を制作。

滞在做る芸術家と実施タイトル:

緒方彩乃[パフォーミングアーツ・グラフィックデザイン] | 家劇場の物件探し in 福島浜通り(写真:奥村健介)



12市町村内にある、15のアートや文化の活動にまつわる「建物」を、出来事が起きる劇場と見立て、そこで起きている日常を演劇的空間に置き換えて、オーナーたちのそれぞれ独自の手法や在り方を丁寧にインタビューし、冊子を編集した。この冊子をガイドにして、新たにまた、この地域に芸術家が誘われていく。

滞在制作期間:2024年1月~2月

まいにちの舞台

家劇場からみえた風景 [福島 浜通り]



②



③



④



⑤

実施事業者：経営芸術総合研究所（東京） 滞在制作地域：広野町、大熊町、浪江町

大熊町で芸術を作り続けるための制作手法を提案する。

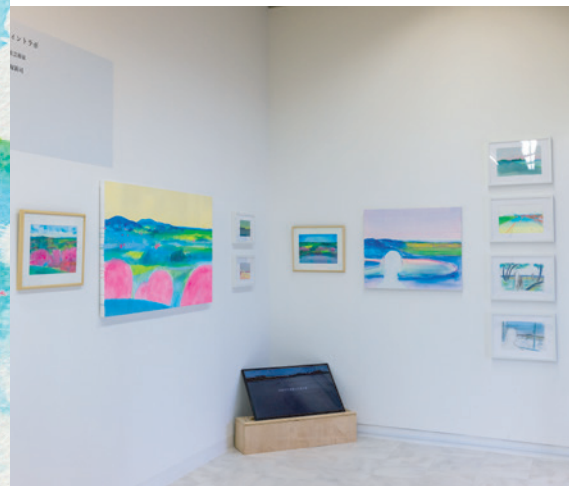
滞在制作芸術家と実施タイトル：田島悠史 佐々木樹〔現代アート〕 | 小さな地域性発見プロジェクトin大熊

写真①②③ 佐々木樹「ポエティック・トリップ」 / 写真④⑤ 田島悠史「テクノ・フィールドワークの試み #1」

ふたりの芸術家が、地域づくりに取組む住民とともに、大熊町で芸術をつくり続けるための手法をリサーチ、作品づくりや滞在制作のための基盤づくりに取り組んだ。詩人は、地域の多様な人々とともに、まちを歩き、詩をつくりあい、メディアアーティストは創作環境の基盤づくりをリサーチしながら、自らも作品づくりを試みた。 滞在制作期間：2023年12月～2024年2月



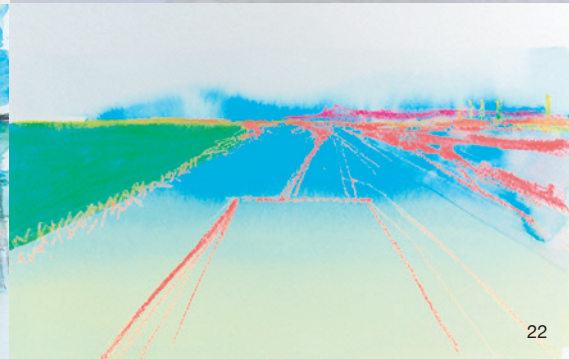
地元住民たちから故郷の記憶の風景を聞かせてもらい、それを絵画として現代美術家が描き、記憶との相違を確認するという作画活動を中心に、同美術家が制作したプロジェクト映像等を含めた多彩な表現を伴った作品を制作。 滞在制作期間:2024年1月~2月



実施事業者: **ティントラボ**(東京) 滞在制作地域: **南相馬市**

記憶の風景を聞き、絵に描き、記憶との違いを確認する。

滞在制作芸術家と実施タイトル: **三塚新司**[現代アート] | **伝わらない記憶のプロセス**



何もかもが変わってしまったのに、小高の空は普段と何も変わらず、綺麗だった。「大丈夫だから。必ず戻って来れるよ。先生を信じて」

窓越しに、じつと見つめる。遠ざかっていく、ふるさとの姿を。

新学期、97人いるはずだった生徒は、たったの7人に。

「遠いね」「どうやったらそこへ行けるのかな」「飛べばいいんだよ」

「空は繋がってるもんね」「じゃあわたしたち、みんな繋がってるのかな」

「そうだね。今は遠くにいるけど、みんな同じ空の下で、繋がってるね」

「会いたいよ」

「わたしも」

「当たり前だって幸せだったな」

「分かんない。分かんないけど、歌いたくない」

伴奏のピアノの音だけが、静まり返った体育館に響く。

生徒たちはまだ、未来に希望を持ってない暗闇の中にいた。

「歌いたくなかったら歌わなくていい」と言えたら、どんなに楽だったか。

先のことは分かんないし、起きてしまった過去を変えることもできない。

結局、人間は今、ここしか生きられない。

今をどうやって生きていくか。

「宝物は、友だちとたくさん遊んだ、小高の海です」

「先生、わたしまた歌いたい」

「咲良が好きだった歌を、咲良の分まで歌いたい。楽しかったものを無くしたくない」

「あの、俺も合唱やりたい」

今も海が怖いし、憎いです。それでも、わたし、やっぱり海が好きなんです。

特に、小高の海が好き。

「また明日って、おまじないみたいだね」

洪水のような言葉たちに押しつぶされそうになる。

それは最後まで、白紙のままだった。

私も昔、そう思ってた。ふるさとなんかいらないうって。

「またみんなに会いに行きます。約束したんです。きつとまた、あの町で会おうって」

「先生、これ、今まで知ってる歌の中で、一番いい歌詞だね」

これから先もずっと、『群青』はあなたたちの歌です。

「それでは、最後の課題です。提出期限はありません。全員、必ず幸せになりなさい」

「おかえり」

「……ただいま」

桜並木の向こう、群青色に輝く青い海が広がっている――。

震災を機に南相馬市小高で生まれ、今や全国で歌われる合唱曲「群青」の誕生秘話と震災に遭った子供たちの葛藤や共鳴の会話をもとに、『この場所で生まれた真実の物語』として映画脚本を滞在制作を通じて綴った。 滞在制作期間：2023年12月～2024年1月

実施事業者：福島中央テレビ（福島県内） 滞在制作地域：南相馬市、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町

震災を機に生まれた合唱曲「群青」をめぐるストーリーと、そこからの希望や復興を感じさせる映画脚本を執筆。

滞在制作芸術家と実施タイトル：福田果歩[映画脚本] | ひびけ、群青(仮)

実施事業者: ベーシックシネマ(東京) 滞在制作地域: 浪江町

地域が紡いできた神社の再建と請戸の人々の声をまとめたドキュメンタリー映画を制作。

滞在制作芸術家と実施タイトル:

板橋基之[映画] | 浪江町請戸菰野神社再建ドキュメンタリー「そこにあるもの」

東日本大震災の津波で全てが流されました

そして今 請戸地区は 誰も住めない土地

12年もの間
基礎だけ残された神社の跡地

誰も住めない土地に
神社が再建されます

そこにあるもの
BASIC FILM
U KEDO.

忘れないでください
そこには 暮らしがあったことを

菰野神社の再建が 請戸の希望となる

震災直前に浪江町の漁港を題材としてドキュメンタリーを制作していた映画監督が、津波に遭ったその場所で、12年の間礎石だけが遺された神社が、地元の人々によって再建していく姿を追ったドキュメンタリー映画の制作。 滞在制作期間: 2023年12月~2024年2月



実施事業者: **MARBLiNG.Inc**(12市町村) 滞在制作地域: **飯舘村**

- ・ 飯舘村の環境を表現した体験型演劇作品(シアターレストラン)を制作。
- ・ 地域住民と一緒に作る飯舘村の大型植物標本作品づくり。

滞在制作芸術家と実施タイトル:

西尾佳那[現代アート] **野宮有姫 武井希美 渡邊塊 中澤ナオ**[演劇] | **めぐりあるきレストランヒカリノトリ**
〜観測者たちの集い〜

一般社団法人コロガロウ[建築] | **飯舘村の大型植物標本**

飯舘村の旧ホームセンターの建物に立ち上げた、「復興」というより能動的に「村づくり」を実践しているユニークなフューチャーセンター「図図倉庫(ズットソーコ)」で実施したプログラム。飯舘村の環境を題材にした作品の中で食事をする体験型シアターレストランコンテンツと、地域住民と共同制作された大型植物標本を制作した。 滞在制作期間: **2023年11月～2024年2月**





福島芸術講

Fukushima Association for the Arts

実施事業者: **モダンシングス**(東京) 滞在制作地域: **12市町村**

地域の今の風景を音(フィールドレコーディング)、文芸、写真を通じてネットで触れられる作品づくり。

滞在制作芸術家と実施タイトル:

関沼博[フィールドレコーディング] **古川日出男**[文芸] **大森克己**[写真] ※ネットアート | **福島芸術講**

フィールドレコーディング、文章、写真を作品とする3人の作家が、それぞれの媒体で12市町村を記録し、記号化されない本来ならば抜け落ちてしまうノイズまでも丁寧に掬い取ろうとした作品群を制作。作品群をひとつの世界観として体験するため、WEBサイトを通じたマルチな鑑賞体験を提供している。 滞在制作期間: **2024年1月～2月**



www.fafta.org

作品本体は、オンラインにて鑑賞することができます。QRコードもしくは記載のURLよりアクセスしてください。
音が作品の中核ですので、音声とともに鑑賞してください。



指導力で世界的に評価が高い、ハンガリーの映画監督タル・ベーラによる、全世界公募から未来の監督たちのための映画制作ワークショップ。世界中から集まった7人の若き映像作家たちは、福島県内でのタル監督による指導のもと12市町村に滞在して映画制作をした。ここでつくられた映画が、7人の監督人生の挑戦とともに世界に広がっていく。 滞在制作期間:2024年1月~2月

実施事業者:フーリエフィルムズ(東京) 滞在制作地域:12市町村

映画監督タル・ベーラ(ハンガリー)による、全世界公募による未来の監督たちのための映画制作ワークショップ。福島県現地に乗り込んだタル監督による指導、世界から集まった7人の才能たちによる12市町村に滞在しての映画制作……その2週間を小田香が密着して記録映画を制作。

滞在制作芸術家と実施タイトル:タル・ベーラ 小田香 シュ・ジェン 飯塚陽美 リン・ボーユー 福永壮志 大浦美蘭 エシュラギ・ロヤ 清水俊平[映画] | 福島映画教室

滞在制作芸術家と実施タイトル：

小高香〔映画〕 | **LETTERS FROM FUKUSHIMA (work in progress)**

「福島映画教室」の模様を小田香監督が滞在制作として密着、記録映画『LETTERS FROM FUKUSHIMA (work in progress)』としてまとめた。すでに現代伝説化したカリスマのタルとのマンツーマンの緊迫する指導の様子や気難しいタルの記者会見、それに反して地元の小学生たちの無邪気な何気ないひとときなど、滞在制作プログラムそのものが作品として活写された。

LETTERS FROM FUKUSHIMA

feb. 6 -19, 2024

Tarr Béla's workshop in Fukushima

JOYSOUND



実施事業者:リジョイス企画(東京) 滞在制作地域:大熊町

子どもたちを中心とする地域住民が常に音楽に触れられる機会をつくる。

滞在制作芸術家と実施タイトル:

嶋田雄紀&大熊クラシック[音楽] | 音楽が日常にある風景の創造



滞在芸術家による、地域コミュニティでのクラシック演奏、大熊町立『学び舎ゆめの森』に通う子供たちとともに町内で流れる音楽の制作を中心に、クラシック音楽を媒体とし、町内外の結びつきや交流を生むプロジェクト。完成した楽曲は、町内放送で流れている。 滞在制作期間:2023年12月~2024年2月

レビュー① 作品レビュー

福島と関係するアーティストからみた、はじめてのハマカルアートプロジェクト ハマカルアートプロジェクト
成果作品展より | ヴィヴィアン佐藤

レビュー② 地域アート

ハマカルアートプロジェクトの持つ特別な使命と、未来への期待 | 藤田直哉

レビュー③ アーティスト・イン・レジデンス

ハマカルアートプロジェクトの1年～未来への種まき | 菅野幸子

レビュー④ 地域コミュニティ再生と文化の担い手より

福島県12市町村で共創できる芸術文化基盤とは | 青木淑子(聞き手:岡田智博)

レビュー⑤ 文化経済と地域創生、イノベーション

ハマカルアートプロジェクトで生まれる創造的発展 | 岡田智博

プロジェクト レビュー・論考

Project
Review/Dialog

福島と関係するアーティストからみた、はじめてのハマカルアートプロジェクト ハマカルアートプロジェクト成果作品展より

ヴィヴィアン佐藤

私は、2017年から年数回にわたり、福島第一原子力発電所内の廃炉過程を視察する「フクイチびびツアー」なるものを開催している。今年で7年目となる。

そのツアーは原発内だけではなく、周囲の帰宅困難区域や遺構、さまざまな伝承館や漁港、そして炭鉱跡地、石炭貯蔵施設、神社仏閣、磨崖仏などの原発以前からある施設やスポット、また原発事故以降に出来たコワーキングスペース、起業家を後押しする施設、ブックカフェ、新しい醸造所なども廻る。

また文学館や商店街、酒場、飲み屋街、映画館、文化交流施設、などエンタテインメントや食など、「復興」に関することだけではなく、福島の浜通りを中心とした未だ知らなかった歴史や文化、魅力に気付いてもらい、その地域だからこそ生まれる新しい可能性を知ってもらうツアーとなっている。そして必ず地物の常磐物の寿司や地酒をいただく。

福島はすでに「復興」や「応援」という段階だけではなく、いままで多くの人が知らなかった固有の魅力や新しい動向に触れたりできる可能性の場所でもある。また福島以外の土地にも当てはまる普遍的な関数も発見出来るかも知れない。

地域と共創し影響を及ぼし合っていくという

ユニークな試みが垣間見えた成果

さて、ハマカルアートプロジェクトは単なる持ち寄りのグループ展でもなければ、滞在して自己実現的な作品制作の発表の場でもなかった。それぞれ国内外のアーティストやクリエイターたちが現在の自分自身と現在の福島や福島の人々との関係性を模索しながら、時には過去や非人間との関係を含め、地域と共創し影響を及ぼし合っていくというユニークな試みであった。

ロココキッチン

滞在制作芸術家：川内有緒＋三好大輔

実施事業者：株式会社植田印刷所

国道6号線沿いを舞台にした食のエッセイとドキュメンタリーを制作した「ロココキッチン」。地元食材を料理し、食し、日常をつぶやくという、国道の移動や食べた物の消化といった身体の内外の距離と時間にまつわる誰もが生きていく上では避けずは通れない「食」をテーマとした。

Snow Flower ～ひとつ終わりひとつ始まる～

滞在制作芸術家：横田岳史

実施事業者：エフエムしろいし

周波数が不安定でノイズと共に送られるラジオという手段は、普段は不可視な気付きにくい人々の気持ちを抱き上げた。エフエムしろいしという札幌の県外の事業者が手掛けたことも興味深い。話した地元の人々との化学変換もあつたに違いない。

大堀相馬焼松永窯震災遺構型AIRプロジェクト

滞在制作芸術家：石上洋 的場真唯

実施事業者：ガッチ株式会社

地元で古くから伝わる相馬焼の店舗を利用した映像作品。本来大堀相馬焼は浪江の大堀で制作されていたが、原発事故以降、事業者は離散を余儀なくされた。陶芸とはその土地の土や釉薬を使用し制作するものだが、その土地から追われ別の地で作られるようになった相馬焼。流転する水や定点をテーマにした映像作品が響く。

家劇場の物件探し in 福島浜通り

滞在制作芸術家：緒方彩乃

実施事業者：久留飛雄己

この、福島市出身の役者であり、小高（南相馬市）に移住してきた久留飛雄己が制作した冊子は、足立区で家劇場を実践してきた緒方彩乃が滞在芸術家として、福島浜通りにある15の「建物」を出来事が起きる劇場と見立て、日常を演劇的空間に置き換えて、オーナーたちのそれぞれ独自の手法や在り方を丁寧インタビューし、編纂したもの。緒方を現地に迎え入れた共同作業から、久留飛の独自の補助線が立ち上がる。その冊子は、この地域の査定不可能で無限大の可能性を持つ、「劇場」たるこの地域での滞在制作の場へと誘う、文化ガイドブックとなる。

小さな地域性発見プロジェクト in 大熊

滞在制作芸術家：田島悠史 佐々木樹

実施事業者：経営芸術総合研究所

詩人佐々木樹やメディアアーティストの田島悠史による歩行しながらの詩作など、その場その時のあたたかもフリージャズセッションのように身体から湧き出る断片を集積し、ときには宙吊りにして見せた。

伝わらない記憶のプロセス

滞在制作芸術家：三塚新司

実施事業者：ティントラボ

現代アーティストの三塚新司が、地元住民たちから故郷の記憶の風景を聞かせてもらい、それを絵画として描き、記憶との相違を確認するという作品。口伝伝承、テキストなどによる記述伝承、そしてイラストなどによる図像伝承という異なった伝承方法が存在するが、メディアに載せた伝承には揺らぎや差異が含まれていく。その差異が豊かさや強さを生み出す。色彩豊かな実験的な美しい作品群。

ひびけ、群青（仮）

滞在制作芸術家：福田果歩

実施事業者：福島中央テレビ

福島中央テレビ実施、福田果歩脚本の『この場所で生まれた真実の物語』の全国公開映画の脚本制作。震災を機に生まれた合唱曲「群青」の誕生秘話と小高の子供たちの葛藤や共鳴の会話。公開が待たれる。

浪江町請戸苜野神社再建ドキュメンタリー「そこにあるもの」

滞在制作芸術家：板橋基之

実施事業者：ベシックスシネマ

漁業で成り立っていた集落全体が、跡形もなく無くなった請戸地区（浪江町）。長大な防潮堤の横にひっそりと立つ苜野神社。12年もの間礎石だけだった神社の再建の模様を追ったドキュメンタリー。映し出される祭の風景は、「祭」そのものの存在意義が問いかけられる。

めぐりあるきレストランヒカリノトリ～観測者たちの集い～

滞在制作芸術家：西尾佳那 野宮有姫 武井希美渡邊塊 中澤ナオ

飯館村の大型植物標本

滞在制作芸術家：一般社団法人コロガロウ

実施事業者：MARBLING .Inc

矢野淳と松本奈々が代表のMARBLINGが運営、拠点にする、飯館村のコメリ跡地に立ち上げた「図図倉庫（ズットソーコ）」で実施。飯館村の住民と飯館の資源を利用して、「復興」というより能動的に「村づくり」を実践しているユニークな施設で展開された、飯館村の環境が映しだされた体験型シアターレストランと、地域住民と共同制作された大型植物標本。飯館村で採取された草花や木々の標本で作られた大扉を透過する光は、飯館村の環境や生態系そのもの。

福島芸術講

滞在制作芸術家:開沼博 古川日出男 大森克己
実施事業者:モダンシングス

フィールドレコーディングの開沼博、文芸の古川日出男、写真の大森克己によるネットアート作品「福島芸術講」。さまざまな媒体で地域を記録し、記号化されない本来ならば抜け落ちてしまうノイズまでも丁寧に掬い取ろうとした作品群。そこに居たならば却って聞き逃してしまうような音たちの標本は、どこに居てもネットでアクセスし鑑賞可能という場所性の問題をも浮かび上がらせる。

福島映画教室

滞在制作芸術家:タル・ベアラ 小田香 シュ・ジエン 飯塚陽美 リン・ポーユー 福永壮志 大浦美蘭 エシュラギ・ロヤ 清水俊平
事業実施者:フーリエフィルムズ

「福島映画教室」。ハンガリーの映画監督タル・ベアラによる、全世界公募から未来の監督たちのための映画制作ワークショップ。世界中から集まった7人の若き映像作家たちは、福島県内でのタル監督による指導のもと12市町村に滞在しての映画制作をした。

その模様を小田香が密着、記録映画『LETTERS FROM FUKUSHIMA (work in progress)』を制作。同記録映画では、すでに現代伝説化したカリスマのタルとのマンツーマンの緊迫する指導の様子や、気難しいタルの記者会見、それに反して地元の小学生たちの無邪気な何気ないひととき。業界の緊張と地元の日常との絶妙な対比が秀逸。

音楽が日常にある風景の創造

滞在制作芸術家:嶋田雄紀 & 大熊クラシック
実施事業者:リジョイス企画

大熊クラシックのメンバーであるヴァイオリン奏者・嶋田雄紀を中心としたクラシック演奏。大熊町立『学び舎ゆめの森』に通う子供たちとともに、町内で流れる音楽の制作。音楽を媒体とし、町内外の結びつきや交流を生むプロジェクト。完成した楽曲は、町内放送で流れるとのこと。その時期の出来事が、その後に記憶として残り続ける。

アートの力によって言葉や想像力を導入することで、地域の生態環境、歴史や文化を新たな視点で発見し見つめ直す共創が映く

そしてこれらのプロジェクト群の中で、特に興味をそそられたものが、「Power of the Invisible ーともにみるみえないチカラー」と仮設建築「記憶と未来が交錯する家」だ。

どちらも固有の土地そのものを形成している物理的な「土壌」や「時間」、「地形」に着目していた。土地をテーマとし、視覚だけではなく、触覚や手触り、歴史的・考古学的な意味、精神的な拠り所として考察した。

Power of the Invisible ーともにみるみえないチカラー

滞在制作芸術家:安芸早穂子 伊藤隆介 gwai 小原二三夫 春日井孝明 川口蓮 奥誠之 さとうゆか 山岡信貴
実施事業者:アートと考古学国際交流研究会実行委員会

前者「Power of the Invisible ーともにみるみえないチカラー」は、アートに考古学的な視点を持ち込み、国指定史跡浦尻貝塚を中心に南相馬市の歴史に培われた文化遺産が持つ「みえないチカラ」に着目し、同貝塚のアウトリーチで大阪と現地を通い続ける縄文の復元画や壁画を手掛ける、画家でイラストレーターの安芸早穂子を中心となって、芸術家、地域の住民、専門の研究者との共創で制作するプロジェクト。科学者が、ドローンを使って浦尻貝塚の俯瞰図を制作し、それを元にフィールドワークを実施、当時の集落や地形を、専門家とともに地元住民や芸術家たちが考察する。安芸がキュレーションした、さまざまな表現手法やバックグラウンドを持った芸術家が、多彩な作品を制作し、地元で公開する中、特に紹介したいのは、生まれつき全盲の彫刻家・小原二三夫「つながる―手ざわりのランドスケープ」。同作品は、ドローンによる視覚表現と対峙しており、大変興味深い。阿武隈山系から太平洋にかけての地形や地震を鎮める力を持つ要石の役割。そして大きな大地を小さな舟に乗る死者が牽引していく。それらが視覚ではなく、完全に手触りの触覚の感覚で働きかける独自の論理的な空間把握があった。

仮設建築「記憶と未来が交錯する家」

滞在制作芸術家:藤本梨沙+清水康平
富岡町の肖像をえがくアートブックの制作
滞在制作芸術家:パフォーマンユニットhumunus
実施事業者:秋元菜々美

後者「仮設建築「記憶と未来が交錯する家」は、かつて富岡町夜ノ森に住み、富岡町役場職員を経験した秋元菜々美によるプロジェクト。

藤本梨沙と清水康平設計による仮設建築「記憶と未来が交錯する家」の制作。かつて秋元の実家があったその土地「RE:COLO-RAB」にて、人々が自由に集まることができる「場」の創出。不定期に「家開き」イベントを開催し、それぞれ土地の記憶や文化をどの様に耕していくかに想いを馳せる。

夜ノ森は、明治期に同地の開拓をおこなった哲学者・半谷清寿のユートピア思想の痕跡が今も残る地で、原発事故後バリケードで囲まれ、避難指示解除後に撤去され家屋が除染／解体された。地表5cmの土壌1,600m平米が剥ぎ取られ、中間処理施設に移されフレコンバックに密封された膨大な土。そこには放射線物質だけではなく、多くの有機物や植物の種子や動物の糞、バクテリアなどさまざまなものが含まれている。そして剥ぎ取られた土壌のあとには黄色い山沙によって客土された。土壌の生成には数百年から数百万年かかると言われている。環境と文化の総合関係の土壌を回復し耕すことに、秋元は芸術家とともに取り組み続ける。

また、小山薫子とキョスヨネスクのhumunusによる8時間のツアーパフォーマンス「うつほの壁」。言葉風景に重ね、音声ガイドを聞きながら街を巡る体験型の作品で、そこから「富岡町の肖像をえがくアートブックの制作」をする。

ツアーでは江戸末期に作られた上手岡鉄山と製錬所跡を巡り、人間と鉱物の非人間的なものとが作り上げた混沌とした物語を浮かび上がらせる。それは震災により明確に顕になった原子力発電所へと重なっていく。新たな補助線を発見し、新しい視点を作っていくこと。鉱山から出るズリやスラグ、原発事故から出るデブリなど残滓における考察。

特にあげた2つの作品があらわすように、環境そのものが震災により不可逆的に変化したこの地に

において、人間以外の非人間の混沌たる生態環境の存在をも理解し、地域の歴史や文化を新たな視点で発見し見つめ直すこと。アートの力によって言葉や想像力を導入する必要性があることに気付かされる。

ハマカルアートプロジェクトは、最初の年にして、そんなこの土地の在り方、近代国家や国土、行政、土地の所有に及ぶ人間が制定した法的なものからはるか古代の視座、東北地方南部に存在する麓山信仰、人間が生まれる前から存在している非人間の物質的な在り方、それらを含めて、活動の担い手と芸術家たちが作品やその行動を通じて見つめ直す機会となるプロジェクトであった。

ヴィヴィアン佐藤(ういういあん・さとう)

美術家、文筆家、映画批評家、非建築家、ドラッグクイーン。全国で町興しコンサルタント。尾道観光大使。サンミュージック提携タレント。大正大学客員教授。



ハマカルアートプロジェクトの持つ特別な使命と、未来への期待

藤田直哉

ハマカルアートプロジェクトは、福島県における、福島第一原発の事故による帰宅困難区域や、それが解除され、特定復興再生拠点区域や特定帰還居住区域となった地域を含む、田村市・南相馬市・川俣町・広野町・楢葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯館村におけるアートプロジェクトである。

2011年の東日本大震災における津波によって壊滅した地域や、帰宅困難区域が長らく解除されなかった地域に、芸術などの力によって新しく文化や産業を生み出す、あるいは、失ったものや古くからあるものとの連続性を作ろうとする事業であると言っていきたい。外部から来た作家の場合は、滞在制作によって地域のことを知り、地元の住民と触れ合うことで、化学反応が起きることが期待できる。特筆すべき特徴として挙げるべきは、ガッチ株式会社が行った伝統ある大堀相馬焼の窯を滞在制作や展示の場として再生したプロジェクトのように、地元の作り手たちも少なからず参加しており、自らの手でその地域の文化を受け継ぎ、維持しながらも、新しく作り上げようという決意性を感じさせるところである。

2011年代以降の日本では、国際的な芸術祭や、地域と密接に関わったアートプロジェクト、ソーシャリーエンゲイジドアートがたくさん開催された。その目的は、創造都市化をする、地域ブランディング、衰退する地域を活性化する、など様々であるが、それらと比較し、ハマカルアートプロジェクトは、極めて特殊な使命を担っている優位性を持っているのではないと思われる。

人類史的な事件が起こった土地であり、長い歴史に育まれた土着的な価値観や文化が残っている場所でもある。たとえば大江健三郎が、核兵器を投下された後に、それでも科学技術立国化・工業化し

ていく日本において、核時代の恐怖と不安を引き受けた創造行為を行ったように、この場所だからこそ生まれる表現が絶対にあるはずである。混迷の21世紀の世界をリードするような価値・思想が懐胎している特別な地域におけるアートプロジェクトとして、ハマカルアートプロジェクトは特権的な地位にあるのではないか。

その先には希望があるのか、絶望しかないのだろうか。国道6号を通り、帰宅困難区域を見ると、そこは衰退していく日本の地方の問題が極端化したような場所のようにも見える。一方で、双葉町の駅前にはOVER ALLsが建物に描いた巨大な絵があり、双葉町仮設庁舎も新築され、新たな居住用の家屋の建造もされており、震災直後の陰鬱な景色とは違う現状、確かに復興していて、戻ってきて住もうとする意志を持つ者の存在が、確かに感じられる。

しかし、いわゆる通俗的な「文化」観における文化資源や文化資本のようなものにおいては、圧倒的なアウェーなようにも思える。そのような場所に、未来志向に、新しい文化や産業の種を撒くことで、未来にこの地に花開く何かの礎になれるのか。この地域での実践の結果、成功することが出来たら、産業の衰退や人口減少などの様々な問題に見舞われている日本の多くの場所にも勇気を与えることになるだろう。それは、衰退や滅亡は避けられないという気分、空気に対し、果敢に挑み、宿命を諦念するのではなく、それを超えていこうとする人間の意志と自由の力を示すことになる。

たとえば、アートと考古学国際交流研究会実行委員会、安芸早穂子、伊藤隆介、gwai、小原二三夫、春日井孝明、川口蓮、奥誠之、さとうゆか、山岡信貴「Power of the Invisible ―ともにみるみえないチカラ―」による浦尻貝塚などを題材にした、南相馬市での作品群にはその可能性を感じさせる。縄

文のエネルギーなどを題材にしたそれには、原始的・野生的と見做されがちな文化の価値をむしろ見出そうとする姿勢がある。それは、東京駅前や丸ビルや銀座などこそが「文化」という通俗的な観念を根底からひっくり返す価値の提案でもあろう。岡本太郎や、六〇年代のアンブレラ演劇の人々が見出したように、むしろそこにある野生的な生命力こそが、文化的洗練よりも価値のあるものかもしれないのだ。そのような、価値の転倒と見方の変更により、アウェーは単なるアウェーではなくなりうる。デジタル化とAI時代において、子どもたちの精神疾患と自殺率は上昇し、むしろ生命としての原初的な燃焼が起こりにくくなっているように見える現在、それは単なる「見方」の提示のみならず、本質的な価値を担いけると筆者は感じている。

三塚新司「伝わらない記憶のプロセス」、横田岳史「Snow Flower 〜ひとつ終わり ひとつ始まる〜」、川内有緒+三好大輔「ロコクキッチン」のように、地域の人々に話を聞き取材することで、地元の人々が見出していない価値が見つかることもあるだろう。あるいは、地元の住人からすれば、外部から来たアーティストの視点や価値観から、知らなかったそれに目が開かれることもあるだろう。アートプロジェクトを契機に、そのような多様なコンテクストという認識に、地域の人たちも拓かれていくことで、自分たちの「戦い方」や希望を見出す力もきっと上がっていくだろう。

構造的なジレンマがあると思われるのが、お金を出す主体の意向と、そこで生み出されるべきものや、アーティストの表現したいものの相克であろう。「お金は出すが口は出さない」というアーツカウンシルにおけるアームズ・レングスの原則や、表現の自由を擁護しようとする気風に乏しい日本では、権力者やお金を出す主体を「忖度」し、逆らうことの表現は抑圧・自主規制しようとする傾向がある。その文化や日本の特質が全面的に悪いわけではないが、しかし「創造」は原理的に、既成の価値観や常識を逸脱し破壊する側面も含むものであり、従って無理解に遭い攻撃されたり否定されたり潰されたりしやすい。特に、着想や萌芽的な段階においてはそうである。

日本を代表する、外貨とソフトパワーの源泉であるオタク文化も、最初は伝統的な日本文化を破壊す

る低俗で幼稚な文化と見做され、非難されていた。経済的に膨大な利益を生み世界を変えているシリコンバレーの精神も、既存の生き方を拒絶したヒッピー文化の延長にあり、ジョブスやイーロン・マスクらは（既存の価値観では）障害と見做される性質を持っている人たちである。何が役に立ち、何が良いもので、何が悪いものなのかを、長期的なスパンで「読む」ことは困難なのだ。「口を出さない」という原則は、そのような予測不可能性への謙虚さであり、現在の価値観や常識では理解や評価が困難な新しい価値や産業の種を誤って殺さないようにするための功利的な要請の側面もある。

ここで主張していることに、警戒の念を抱く向きもあるだろうと思う。しかし、筆者がここで主張したいのは、社会主義リアリズムのように、ネガティブな事象をただただ強調し革命に向けた情念を煽れということではないし、美学用語でいう「敵対性antagonism」をただただ顕在化させ、内乱や内戦のリスクを高め、積極工作の温床にしやすくするというでもない。個人においても、地域や社会においても、矛盾や葛藤や対立や衝突は当然あるものであり、この地域ならではの特殊性があるはずであり、そこを潜り抜けた先に見えてくる新たな境地こそが世界に示すべき新たな価値となる、その実現のためには、危なっかしきヒヤヒヤするような創造的な危機の段階もどうしても必要になってしまうのではないかと、それに対応する心構えをしておく必要があるのではないかと、ということを主張しているのだ。

ハマカルアートプロジェクトが、地元の価値観や文化、縄文のような考古学的なものを尊重しながら創造を支援することの意義は、シリコンバレーと対比すると分かりやすくなるかもしれない。シリコンバレー的な、テクノロジーと資本主義によってどんどん進歩を進めていこうとする、キリスト教的なユートピア観に駆動されている創造性とは異なる形の創造行為がこの場には期待できる。板橋基之による、浪江町請戸若野神社再建ドキュメンタリー『そこにあるもの』におけるローカルな信仰へのアクセスの延長線上に、おそらくそれはある。神道やアニミズムとも関わるかもしれない地元の価値観を尊重し、その延長線上に、世界への、共感を呼ぶような提案をなすような可能性の萌芽がある。

この地域での創作は、必然的に、科学と自然、洗練と野蛮、理性と感性、合理性と信仰、政治と個人、過去と未来、グローバルとローカルなどにおける激しい葛藤を内在化せざるを得ない。たとえば、藤本梨沙と清水康平の仮設建築「記憶と未来が交錯する家」は、過去と未来の狭間で葛藤している現在を主題化した作品であろうことが、そのタイトルから分かる。

そして、その矛盾や葛藤こそが、新しい価値や美を創造するために重要な契機である。ヨーロッパの美学において大きな影響力を持つフリードリヒ・フォン・シラーは、その芸術論の中で、様々な物事の対立と葛藤の末に、ある種の昇華、止揚が起こり、それを美と深く関連付けた。演劇を想定すれば、よく分かるだろう。葛藤の果てに、カタルシスも訪れる。そのプロセスの中で、当初の対立の構造とは異なった質の、予想外の展開が起き、未知の結末に着地していく。義務と自由、社会と個、理性と感性が激しく相克していった結果、それらが対立でも矛盾でもない境地、精神的に高次元な段階が訪れるとシラーは言う。彼によると、人間が真の人間になるのはその段階である。対立や葛藤や軋轢は、その意味で、新たな美的な創造、未知の次元への高次化（新たな価値の創出）、人間が「真」の状態になるために、必ずしも排除すべきものだとは考えられていないのだ。実際、シラー自身も、フランス革命前後の社会的・世界的な問題を引き受けながら深く葛藤し演劇作品や詩を作り続け、そのひとつは遠く日本でも誰かが聞いたことがあるベートーベンの『第九』の歌詞であり、新国立劇場などでオペラも上演され続けている。

その意味では、西尾佳那、野宮有姫、武井希美、渡邊塊、中澤ナオの「めぐりあるきレストランヒカリノトリ〜観測者たちの集い〜」には可能性を感じた。図図倉庫（ズットソーコ）という、放射性物質の測定やサイエンスツアーの開催など、理系的・科学的な志向を持つ施設の中で、それらに関連した演劇や美術や食事を提供するというもので、科学と芸術、理性と感性の対立を止揚した美と創造性が確かに感じられた。また、「Power of the Invisible ―ともにみるみえないチカラ―」における伊藤隆介作品には、縄文的な生命のエネルギーを感じさせる映像が、メディアアー

ト的に生み出されているということ自体を見せるという意味での批評性と、テクノロジーと縄文的なものを止揚し新しい価値の予感を覚えた。それは、縄文・土俗的なものと、近代的なテクノロジーである原発と、未来に向けたロボットなどの新しい産業の拠点が斑に存在しているこの地域の新しいアイデンティティの兆候のように見える。

矛盾し対立し葛藤するものが、調和するという理想を、シラーは「美的国家」という概念で呈示した。個々が完全な人間として成長し、そのような人々によって構成された社会・国家の調和を実現させるためには、「遊戯」や「美」がその通路となると彼は言う。だから、一見非生産的に見える、遊びや美を大事にしなければならない。そして、その段階に辿り着くまでには、激しい葛藤や動揺、苦痛や実存的危機も潜り抜けなければならないフェイズも、確実にある。地域の芸術に関わる人間たちも、思春期の子どもと接するように、それをうまく見守りながら、駄目にしないように育てていく心の態度を発明する必要があるだろう。

この美的国家という目標は、もちろん、理想である。シラーも、それが実現できるのは地上ではないのかもしれない、仮像の中だけかもしれないと嘆息している。しかし、これほど国内的にも分断と対立が激化し――日本において、SNS時代的な分断の最初に目立った例は、震災後の原発事故を巡る言説ではないかっただろうか――世界的にも第三次世界大戦を予感させる衝突が顕在化している現在、美的国家とは、私たちがもう一度目指してもいいもの、もとい、目指さなければ我々人類の生存すら危うくなるようなものではないかと思われるのだ。

この地域において、矛盾や対立や葛藤を内在化し昇華した作品＝美を指し示すことが――抑圧や管理の結果としてや、見せかけの欺瞞ではない形で――出来れば、それは、世界中の様々な対立や葛藤や衝突に悩む人々にとって、ひとつのモデルを提示することになるはずだ。

ハマカルアートプロジェクトが行われる地域において、遊びや美を通じて、「真の人間」になる人たちが増えていくといいと思う。喜びを通じて本質的な変化を人間に起こし、それによって地域が質的に変

容していき、高次化していく触媒になるこそが、芸術や文化の社会教育的な機能としてある（それは指標によって計測することが難しいのだが）。その結果として、人々の能力や幸福度、発想力や創造性が高まり、観光や移住や、イノベーションなども促進される効果もあるはずだ。

これだけ圧縮された社会的課題、矛盾、葛藤がある場である。それらを潜り抜けた末にある、巨大な「昇華」としての美的なビジョンや思想には、閉塞しているように感じられる日本や人類において、新たな一手を提案しうような、大きな価値が孕まれる可能性が高い。きっとそれは生まれる、いや、生まれざるをえないはずだ。そして、自分の子どもがどう生きるか、どう成長し成功するのかが誰にも読めないのと同じように、その生み出された価値にどれほど大きく広い未来があり、どれほど展開していくのかも、誰にも分からない。その広大な未知に向けて飛び込み、かつ、生み出された価値や文化は生命のように続くことを、私たちは信じ、育もう。

藤田直哉（ふじた・なおや）

1983年、札幌生まれ。SF・文芸評論家。早稲田大学第一文学部卒業。東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻修了。博士（学術）。日本映画大学准教授。著書に『虚構内存在 筒井康隆と〈新しい《生》の次元》』（作品社）・『シン・ゴジラ論』（作品社）・『新海誠論』（作品社）・『ゲームが教える世界の論点』（集英社）、編著に『3・11の未来』（作品社）・『地域アート』（堀之内出版）・『東日本大震災後文学論』（南雲堂）など。近戦後日本の大衆文化、ネットカルチャーなどを中心に研究・評論活動を行っている。



ハマカルアートプロジェクトの1年～未来への種まき

菅野幸子

2023年、福島県の浜通り地区に位置する12市町村を舞台に、大規模なアーティスト・イン・レジデンス・プロジェクト「芸術家の中期滞在制作支援事業（通称ハマカルアートプロジェクト、以下「ハマカルアートプロジェクト」）」が始動し始めた。

アーティスト・イン・レジデンス（以下、「AIR」）とは、その名称の通り、アーティストがある場所に一定期間滞在しながら創作活動を行う仕組みのことだが、近年、世界各地で急増している。日本でも、全国各地で100を超える事業が展開している。その土地の風土や環境、文化、生活スタイルなどの特徴に合わせてプログラムを設計できることが特徴と言え、そのため、規模も場所、芸術分野や運営方法も多種多様で個性豊かである。

従来、地域に芸術文化を根付かせていくためには、コンサートホールや劇場、美術館・博物館といった文化施設を基盤としていたが、現在は、施設を拠点とするばかりでなく、地域でのアート事業を展開するアート・プロジェクトや芸術祭という形で展開されている形態が増えている。このアート・プロジェクトの一つとしてAIRが展開されているのだが、AIRのもう一つの重要な特徴は、アーティストたちが試行錯誤する過程が重視されているということにある。

この過程においてアーティストたちは、地域の方々との会話や交流を通じて、地域の歴史や風土、文化を知り、自らの創作作品のヒントを得る。いわば、地域の方々との共創のプロセスを体験することになる。分野横断、実験的な試みも実践できることから、マイクロソフトなど世界をリードする企業やハーバードやMIT、英国のオックスブリッジといった大学など新たな価値を創出しようと試みる最先端の組織においても盛んに取り入れられている。このような特徴を持つAIRであることから、未来に向けて地域を再生しようという地域でも盛んに取り入れられるようになってきているのは、決して不思議なことではない。

さて、上述のプロジェクトを立ち上げたのは、経済産業省（以下、「経産省」）の若手有志たちで、2022年7月に「福島浜通り映像・芸術文化プロジェクト」がパイロット・プロジェクトとして実施され、2023年6月に省内の有志が志願して「福島芸術文化推進室」が正式に立ち上げられた。さらに、「原子力被災地域における映像・芸術文化支援事業」として3・3億円の新規予算も交付された。想定されていた事業は、この芸術家の中期滞在支援事業に加えて、作品制作実習支援事業と福島復興の発信に係る作品制作支援事業の3事業である。今年度の各事業は、公募で選考された委託団体に委託され、運営されている。注目すべきは、これまでアートと関わってきた経験があまりない経産省の若手職員たちが福島県12市町村で展開している、これら芸術文化を支援する各プロジェクトに伴走していることである。

こうして始動したハマカルアートプロジェクトだが、公募で選考されたのは、14件にのぼる多彩な企画であった。映画、文芸、デザイン、建築、演劇、音楽、ラジオのボイスドラマ、脚本、現代アートといった多岐の分野にわたるアーティストたちやクリエイターたちは、この地に滞在しつつ、この土地の歴史、風土、伝統や文化に向き合い、この地に暮らす人々との会話や交流を重ね、さまざまな作品を生み出した。公募で寄せられた申請書に記述された企画案の段階では、イメージが湧きにくい案や果たして実現できるか懸念される案もあった。そこで、2023年12月中旬に開催された中間報告会では、専門家たちからのメンタリングを受ける機会が設けられたのだが、それぞれのプロジェクトの輪郭も大分明確になり、最終的な作品としてどう結実していくのか、非常に興味深くもあった。もともと、アーティストたちやクリエイターにとっては、厳しい条件や時間の中で、生活されている方々から直接お話を聞いたりして作品に結実させていくことは、決して簡単なことではない。しかしながら、実際にそれぞれの企画が作品と

して結実していくにつれ、それぞれの作品を通じて語られる地域の方々や表情や声は穏やかで、さまざまな葛藤や経験を抱えながらも昇華された思いが込められているように伝わってきた。だからと言って、全ての方々がそうとは限らないことには留意しなければならないのは当然のことではあるが。

しかし、この土地だからこそ受け継がれてきた風土や歴史、そして、ここに暮らす人々との交わりによって生み出された作品群は、いずれも唯一無二な存在になっていた。あるアーティストは、中間報告会では、まだ、自らが求めるイメージの輪郭が見えていなかったようだったが、最終報告会では、確実にこの地に存在する何かを掴み取っていたように感じられた。このように、新しい作品が立ち上がっていく瞬間に立ち会えるのは、なにものにも代えがたいAIRの醍醐味でもある。これを裏打ちするように、アーティストは、この地に通い続けて、作品を創作したいと改めて感じたと言ってくれた。この土地と関わることで、確実にアーティストたち自身にも目に見えない変化をもたらしているのだらう。何よりも、様々な思いが交錯している地域に潜在している力やエネルギーがアーティストやクリエイターたちを惹きつけ、い訳がない。関係人口、交流人口という言葉が良く聞かれるようになってきているが、人と人、人と土地をつなぐことに他ならない。

ハマカルアートプロジェクトに限らず、福島県内では、南相馬市小高地区での「群青小高」AIR、葛尾村での「Katsurao AIR」などAIR事業が増えているが、福島県内のAIRの原点は、いわき市の方々と蔡國強氏との長年にわたる交流にあるようにも思われる。無名のアーティストだった蔡を応援し続けたいわきの人々と蔡は、国を超えた友情と信頼を育み、東日本大震災を乗り越え、芸術廻廊を作り上げてきている。人間同士の付き合いに最も大切な関係は信頼だ。願わくば、ハマカルアートプロジェクトを通じて、同様の関係が浜通り各地で育まれていくことを期待したい。

しかし、ハマカルアートプロジェクトは始動したばかりで、いわばやつと種まきされたにすぎない。これから、多くの人々が関わりながら、丁寧にこの地と向き合いながら、プロジェクトを育てていかなければならない。これからの地球社会のために、私たちが

出来ることは何だろうか。その問いを常に自らに問いながら、この地を、未来の地球社会に向けての試行錯誤の場、新たな価値を生み出していく場、友情と信頼を育む場にしていかなければならないのだと思う。

菅野幸子（かんの・さちこ）

AIR Labアーツ・プランナー／リサーチャー

ブリティッシュ・カウンシル東京、国際交流基金を経て現職。グラスゴー大学美術学部装飾芸術コースディプロマ課程修了。東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻（文化経営学専攻）後期博士課程修了。博士（文学）。

ハマカルアートプロジェクト2023・スーパーバイザー。専門領域はアーティスト・イン・レジデンス、英国の文化政策、国際文化交流。2017年より文化庁との共同研究「諸外国の文化政策等に関する調査・研究」において英国の文化政策に関する動向調査を担当。2023年に発行された『アーティスト・イン・レジデンス～まち・人・アートをつなぐポテンシャル』（美学出版）を共同編集。著作として、『現代アートとグローバリゼーションーアーティスト・イン・レジデンスをめぐる一』（『グローバル化する文化政策』佐々木雅幸・川崎賢一・河島伸子編著、勁草書房、2009年）他多数。



福島県12市町村で共創できる芸術文化基盤とは

青木 淑子（聞き手：岡田 智博）

さまざまな芸術家が、福島県12市町村に滞在し、関係を持ちながら制作をする「ハマカルアートプロジェクト」。震災以降、地域で芸術文化活動をしてきた担い手からみた場合、最初のプロジェクトはどう評価できるのでしょうか。

震災の記憶を語り継ぐとともに、富岡演劇祭など、地域に演劇活動と交流・関係の場をつくりだしている、NPO法人富岡町3・11を語る会代表の青木 淑子さんに、お話をうかがいました。聞き手は、ハマカルアートプロジェクト2023統括ディレクターの岡田 智博です。

富岡町3・11を語る会——演劇と語り部「表現」によるコミュニティ再生活動

青木 私は、NPO法人で富岡町3・11を語る会というNPO法人を作って活動しています。

活動の一番の中心になるのは何かという、語り部とよく言われる震災の伝承活動、すなわち語り部活動を2013年から富岡町を拠点として行っています。

具体的に言うと、原子力災害、福島の場合は原子力災害によって福島がどうなってしまったかという現状と課題を、公演という形でお話しをし、富岡町を震災の後、町を回りながらガイドをして、所謂震災ツアーのガイドをする。それに関わる資料を発行するといったようなことを中心に行っています。

この語り部の活動をするにあたり、重要な文化としてというものに演劇があると考えています。私自身がずっと演劇の活動を高校での教育とともにしてきましたので、人に何かを伝えるためには、表現力があるっていかないといけないということがわかります。

今この地域の課題は何かといえば、原子力災害によって失われてしまったコミュニティをもう一度復活させることだろうと考えています。つまり人と人の繋がりが奪われてしまっている、そのコミュニティを復活させるためには、何が必要かということに

なった時に、やはり自分の言葉、自分の思いをちゃんと相手に伝える、相手の言葉、思いを受け止めることなのです。このように、コミュニティの再生に向けて育むために、一番必要なものは何かと言ったら、そのような文化活動だろうと、その活動として「語り部」が存在するのです。

ここで、演劇の要素が重要なのです。その表現力を伸ばしてコミュニティをもう一度この地域に人の繋がりのコミュニティを再生させるための文化活動として、演劇というのはとても素晴らしい力を持っている、人と人が繋がっていかないと出来ないものですから、まさに人と人が繋がっていく演劇をこの地でもう一度芽吹かせて、「語り部」を含めた、人と人との関係をつくる活動として、コミュニティをより強固な物にしよう、ということが私たちのスタンスです。

具体的な活動としては、語り部活動とともに、表現活動として「富岡表現塾」というものを年間通してして実施しております。富岡表現塾として、町に住んでいる成人向け大人の音読教室というのを月に2回、それから子どもの音読教室を不定期に実施しています。

それから、演劇キャンプといって年に1度、2泊3日で富岡町に主に東京から演劇人、演出家、役者やミュージカル俳優、ろう者演劇をやっているノンバーバルの聴覚障害の役者さん、殺陣師など多彩な講師として招いて、毎回5講座くらいのワークショップを9年にわたり続けています。

大きなものとして、2023年度が第2回となりました、富岡演劇祭があります。2020年度に一回目を開いたのですが、富岡を演劇の聖地にしたいという大きな目論見で、平田オリザさんが兵庫県の豊岡で豊岡演劇祭をやっていますけど、そこに及ばないとしても私としては、富岡で演劇祭を開くことで、富岡で演劇をやろう、演劇を作ろうという人たちが集まってくれるといいなということで、演劇祭をやっております。

岡田 「語り部の会」の名称ですが、演劇を中心とした表現によるコミュニケーションを高めていく文化活動に、富岡で取り組まれているのですね。

青木 コミュニティ再生活動だと思っています。

岡田 いいかえれば、演劇を通じたソーシャルインクルージョン（社会包摂）活動ですね。最近、アートプロジェクトの分野において、演劇を見るではなくて、演劇の人が地域に入っていくことによってコミュニティを作り出すことも、文化の価値とされるようになってきました。アウトリーチとよくよばれる手法で、それを青木先生と会は富岡でされているのですね。このような、全国的なつながりをもった、演劇コミュニティの活動をどのように展開されているのでしょうか。

青木 演劇系の大きな事業は、東京にある日本演劇教育連盟という全国組織と連携して行っています。これは第二次世界大戦後に新しい教育が始まった時から出発しているもので、当初は学校の先生たちが授業の中に演劇を取り入れて子ども達の表現を伸ばそうという形で始めた演劇教育が発端とした組織で、現在は学校の先生よりは一般の色々な地域で演劇の指導をしたり、色々なアマチュアな劇団作ったり、そういったことをしている人達が全国的に加盟している組織です。そこから例えば演劇キャンプをする時には教師だとか運営のスタッフが支援に来たりします。そして、地元としてはうちのスタッフあるいはボランティアスタッフで現場を実施しています。

岡田 地元で現場ができる担い手、特にマネジメントが出来る人々が育ててきているって感じるのでしょうか？

青木 マネジメントは、うちの事務局員で、できていると思います。スタッフの人数が少ないのですが、通年の語り部活動にあわせ、演劇祭も演劇キャンプも全部自走しています。

岡田 どういう方々が携わっているのですか？

青木 若い人、二十代、三十代のまさに福島県で生まれ育った人たちが中心に活動しています。たとえば、福島県の中通りに郡山市という大きい街があるのですが、ここにある国際アート&デザイン大学の声優科を卒業した卒業生たちが専従のスタッフとして活動していたりします。

岡田 地域で若くして文化を仕事に活動できる場をつくっているのはすごいと感じます。

青木 若い彼らが福島にいてこのような活動を事務局としてスタッフとしてやってるというのは私もとてもすごいことだなと思ってます。

岡田 一方で語り部活動を見た場合、若い方が参加されているだけでなく、地域の方々の表現力が必要になると考えるのですが、語り部として、演劇的手法というのは大分活かされてるんですか？

青木 あります。語り部そのものが人の前で話をするのには、人にちゃんとアピールする力がないと出来ない、語り部さん達の話し方とかそういうものに関しては、かなり演劇というよりはコミュニケーション能力で私達は言ってるんですが必要だと思ってます。

演劇活動としては、その発展形で、町民劇というものを作りました。これもうちの会が町民を募って演劇で今の町の現状や課題を発信しようということで、2019年にはじめたのです。その時に東京から演出家を招きまして、脚本、演出をお願いしました。最初、富岡で発表し更に東京公演も上演しました。まだ、当時の富岡ってまだ人がほとんど住んでませんから、その文化センターで500人近い人が入って演劇を見るっていうのすごい画期的なことでした。

その時結成したグループが、ずっとなんとなく繋がっていたのですけども2023年、正式に富岡町民劇団として結成しまして、現在15名の町民劇団の団員がおります。その中にはもちろん語り部もいるのですが、これから富岡で何か演劇をやっていこうといった場合に、そういった町民劇団が運営というよりプレイヤーであるということもひとつの例です。

岡田 このような表現活動のために、どのようなトレーニングをされてきたんですか？

青木 演劇キャンプに参加してもらったりとかしています。私は演劇に関してプロもアマチュアもないと思ってる人間なので、自分の中に伝えたいメッセージがあって、それをなんとかして伝えたいと思った時には伝わる話し言葉を考え、伝えられるように促しています。

一応、演劇のワークショップの際の演出家はプロですので、その方々からは基礎的なトレーニングはしてもらいますが、それ程、修練を積んでるわけではありません。

岡田 先生のような「座長」が、地域の身近にいて、コミュニケーションを常にとっているからできると

ろなのかもしれません。そうでないと、語る側は、何したらいいかわからなくなってしまいますから。その点ではコミュニケーション能力の涵養というのは、演劇活動と行き来しながら得ていけるというかたちは、演劇というのはまちの「部活動」的なかたちで定着しつつあるのでしょうか？ それがあるから語り部活動自体も定着しているのでしょうか？

青木 富岡そのものがまだ2300人くらいしか住んでない町で、なんの活動してるかっていうと2300人の中でも町にちゃんと暮らしとして居住している居住者というのも半分くらいで、あとの半分は所謂作業員と言われる様なお仕事をやる為に一時的に来ての方とかも沢山いるので、富岡町でなにか活動しようとしたら今とにかく人を集めようと思って集まらないのが現実です。

実際は、文化活動やりますと言うと、すぐにたくさん集まってくるかっていうと、これがなかなか集まってこない。文化ってスポーツや商売のように成果が数となって見える訳はないし、5対10で勝ったとか負けたとかいう世界でもないから、現れたものを良いか悪いかっていうのはかなり主観的なものにもよるので好き嫌いもあるし、そういうことを考えると文化活動が浸透していった町民のものになる市民権を得るのはとってもとっても大変で、まだまだだと思います。

岡田 とはいえ、語り部や演劇活動に対して実感を求める人達がいるから、通年の活動や人が集まっているのは、同じような人口や地理的なところでは、あまり無いことです。

青木 そう思えると嬉しいですね。確かに町民劇団やりますよって言った時に15人もの人達が手を挙げてくれたことにはすごい感動しました。

岡田 そういうことが、全国的にみても普通無いです。

青木 ですね。

岡田 なおかつ、若い人多い。不思議なことに。

青木 多くはない、まあ半分くらい。

岡田 半分というのがすごいではないですか。語り部の方々が、語り部になろうっていうのは、どういうプロセスを得てなのでしょう？ 基本的に今、避難などで、地元を離れる人が多く、未だばらばらになっていて。一方で、地元では移住者の方が多いみたいな不思議な町になってきている状況で。

青木 語り部そのものを始めたのは2013年で、ま

だ避難先の郡山市でこれはどうしても語り継いでいかなければいけないことだと、その時思ったことからです。特に、原子力災害は、目に見えない災害なので、話していかないと分かりにくいものです。そういう意味で、語り部になりませんかって最初公募しました。

そうしたら最初18人の方が手を挙げたのです。皆避難してて、富岡に住んでる人はもちろん誰もいません。

最初の18人の人の内訳を言うと、ほとんど高齢者です。若い人は1人もいませんでした。その18人で立ち上げて、2016年にはNPO法人になりまして、ずっとその後もその高齢者達の語り部で頑張ってる活動してきたんですが、最近になって20代の若者が参加したり、50代くらいの、震災当時はまだ子育て中のママだった人達が今、13年目によく私も喋るっていう風に入ってきているっていうのが現状です。

年を経て、全体的に語り部が高齢化しているの、次の世代を育てようっていうことで育成講座っていうのがはじまっています。その育成講座に手を挙げて入ってくれた方達が今段々育ちつつあるという現状です。

岡田 一方で先生の方が演劇活動をしてきたっていうことがあるから、学校の声優科とか演劇に関心ある若い人たちが関わるようになってきた。

青木 それはあると思います。郡山の専門学校の声優科さんは、富岡の演劇キャンプに来ることが授業のカリキュラムの一環となっています。だから、全生徒が来てくれるんです。

岡田 それが経験と学びになっていると。

青木 そうかもしれません。

岡田 なおかつ、福島県内に、ちゃんと表現の現場があるっていうことを経験し、自分だったら関われるかもしれないということがあるのでしょうか。

青木 それは大きいと思います。

ハマカルアートプロジェクトを含め

多くのアーティストが訪問

交流する12市町村にあって

岡田 先生が地元で取り組まれてきた文化活動の

一方で、最近、地域に訪問できるようになり始めてから、アートをここでしたいと訪問する人々が増えてきています。それも、避難地域だったときには、ただ、題材にするために入り込むような芸術家も多かったのですが、地域に住んだり、長く関わってこうという人々が数多くいます。

青木 そうやって文化活動を外から来て、関わりたいという人が多く訪れるようになったことは、すごく嬉しく考えています。どうしてもこの地域は、どっちかという、文化活動よりは、町を建て直すということで、道路作ったり、ビル作ったり、大きな工場作って、そこに人々をたくさん寄せるということの方が復興に役立つと思われていた時期がありました。

それが最近になって、文化活動の力でコミュニティをもう一度再生して、人と人を生かしていくのではないかなという考え方に少しずつ変わって来てる感じます。そういう時に、入ってきてくれるアーティストに対して、私はやっぱり嬉しいなと思う部分があります。

しかし、半面、何のために来てるのかなって？と思うこともあります。アーティストとしての自分自身の制作活動のために来て、何かすると、そこで帰ってしまうとか、こんにちは、さよなら的な訪問者のなそういう風な人たちのものも沢山あります。

それからもう1つ言わせて頂ければ、経産省をはじめとするかなりの補助金がこの12市町村に事業として投入されているが、どうもその補助金目当てで活動していて、その活動が町民のものになってんのかというのが分からないと思えるっていう、2つの側面を、今の私は感じます。

岡田 先生が指摘した、2つ側面のほかに、3つ目が今、あると私は考えています。ハマカルアートプロジェクトで展開した地域が、全国的にも東京などの大都会を離れて、居場所や活動の場を求める人々が、身を置きたい場所になっているのではないかと。

青木 何の居場所？

岡田 自らをなにかのために活かすことができる、居場所や活動の場所になりつつあるのではないかなということです。東京などの大都市ではない、生きる場所。

全国広く見た場合、アートができる居場所としての移住先として、京都や群馬の中之条に多くのアーティストが移住したりします。今、世界的にも展開して

いる、アーティスト・イン・レジデンスの取り組みも、ある種そういう「居場所」ということもできます。

全国で、移住者や関係人口をまるで競って呼び込もうとしている中で、この12市町村というのが特に選ばれる場所になっているように、今回の多彩なハマカルアートプロジェクトに取り組んでいるアーティストや担い手をみても、感じられます。

青木 ここに来て、何か生きる場所を見つけて、また自分で新しい何かがそこで生み出されるっていう場に、この地域がなるのなら、私はそれで、とても良いことだと思います。

現状を言いますと、私を知ってる限りで言えば例えば、富岡にもいっぱい来てますし、移住してきた作家や担い手も各地に増えてきました。アーティストがいっぱい来て、それぞれがすごい何か旗印を揚げながら、「我こそは」みたいな形で、俺ここで何かやりますみたいな形で来てるんですけど、私にはバラバラに感じてしまいます。アーティストは元々つるみたくないだろうし、バラバラだっていうのもある所ではわかってるんですけど、私はやっぱり、この地域をこういう文化の土壌にして何かここでやろうとしているんだったら、やっぱり最終的にはこの地域の何かを作るっていう所では、私は地域と繋がらないと、ダメだと思うのです。しかし、非常に難しいのがアーティストさん達の繋がりなのです。

私なんか、一緒に何かやりたい、こういうことをやってるんだったら、じゃあ私が今やってることで何か繋がりますか？ じゃあこっちは繋がろうっていう風に呼びかけても、現実的には来ない。例えば、富岡演劇祭やります、すごく微力だし、ズブの素人だし、プロの皆さんの力を借りたいし、来てくれますか？ って誘っても、新しい人たちは来てくれないのです。その繋がりを私はやっぱり欲しいと思うのです。

演劇以外のアートの世界は私にはわかりませんが、同じこの地域でこの地域の皆さんの繋がりをこの私達の文化活動で繋がろうと思ったら、繋がりたいと思うのですが、僕がやったのを見てください、僕がやったのを見てくださいというのが多くて、一緒にやりまじょうじゃないのです。

岡田 そういう状況の中で、ハマカルアートプロジェクトがはじまりました。最初のハマカルアートプロジェクトを見た場合どのように見えただろうか。

青木 最初、補助金が下りて何か滞在して何となくこういうことをやりましたみたいなのも大したことはいんだろうなと思っていました。実際に、成果に触れてみて、面白いと思ったんです。そこそこやっぱりここで出来るんだな。アートの表現の種類が多彩で、富岡であろうと大熊であろうとどこであろうと小高であろうと、12市町村内各地で、こんなことが出来るんだなっていうことを先ず、感じました。

成果をまとめてみせてくれることだけでも、何となくやり散らかされたという感じではないし、やってこまですてやれてますよ。ここから先またこうやるんですよっていうような、ことが成果の作品からみられたました。

また、折々の報告会で、滞在した芸術家や、岡田さんもそうだけど、地元富岡の秋元菜々美さんや南相馬で活動した安芸早穂子さんのようなプロジェクトの担い手が、説明やトークをしてくれて、そのトークの中で、次にやりたいことみたいなことが感じられたのです。

なので、報告会でプロセスや成果に触れて、自分が頭の中で最初、ハマカルアートプロジェクトは、何となく大したことないんだらうと思ってたものが、結構ちゃんと足ついてやれているよねと思ったのです。

ただ、具体的に1つ1つこの作品がどうだとかとなると、たくさんありすぎてぼんやりして、何とも言えないんです。それは、地域でも同じで、まだ、浸透してきてないとは言えると思うんです。そこら辺が、これからなのかな、という感じを持ちました。

福島県12市町村における アートプロジェクトを通じた共創とは

岡田 特に今回14のプロジェクトっていうことを見たときに、小高に移住した久留飛雄己さんのように取材して創作の場の本を作るとか、植田印刷所さんのように、国道6号線と食をテーマにしたエッセイ本と映画を作るみたいに、地元とつながったコンテンツを残しながら、それが今後も継続した繋がりになる活動が多く生まれたように思います。

ただ、繋がりをこれから地域に浸透させて、先生が取り組まれているような、共創の輪に資するようにしていくためには、どうしていくといいでしょうか。

青木 何と繋がりたいかにもよるんですけども、ま

ずそれぞれがやっていることっていうものは、さっきも話したように、たとえば、富岡なら富岡、小高なら小高っていう風に、少なくとも全部じゃなくてもその近くでやっているお互いに同じ土地の中でやっているって人たち同士が、お互いにまず自分たちがやっていることを、わかり合うっていうことがまず必要です。

それから今度は、その中から自分がやっていることを今度はもっとたくさんの人に知ってもら、その土地に暮らしている人達がわからなければ何か特別にわけのわからない人達が来て、何かわけのわからないことやっているで終わっちゃうから。

それをまず周知させる努力というか工夫というか、それが私は一番必要なんじゃないかなと。

例えば地域で、外の芸術家と交流して、一生懸命アートプロジェクトをやっている、それをどんな風に知らせようとしているかっていうと、ほとんどしている人が持っている狭いコミュニティにいる人しかわからない。

そういう自分たちだけがわかっていればいいんだ、みたいな形のその感覚ではなくってその辺の道行くおばちゃんでもおじちゃんでも皆がこの町に暮らしている人達がわかるような、広げ方というか、それがないと私地元と繋がっていくっていうふうにはならないと思うんですけどね。

岡田 それこそ、ハマカルアートプロジェクトにとっては、私たちが「伴走者」として、もっていかねばならないことだと実感しました。2023年に、浜通りで開催された「常磐線舞台演劇祭2023」では、平田オリザさんが地域コーディネーターを各地に置き、富岡町においては青木先生にお願いして、地域とのコミュニケーションをサポートしてもらったという配慮は、さすが平田オリザさんはそこら辺がやっぱりよくわかられていると思いました。

青木 演劇祭に関しては、メディアを飾った有名な人たちがみえる一方で、地域コーディネーターは任せられたけど、自分たちで地域活動をしなないといけなかったのです。富岡は、平山勉、青木淑子、秋元菜々美となったのですが、それぞれに指示やチラシが行くので、それでは思うように地域とつながらないから、集まろうって言って無理やり集めたんです。そして、私達が勉さんからチラシをもらえながらお水はどうするかトイレはどうするかっていう相談をしようって

いう風にしたら富岡に関してはまとまりました。

なので、この後に関しては、ハマカルアートプロジェクトも、パイプを繋げていくと、もっとこの活動が活きてくるっていうか、皆が興味を持ったり、ある時は応援をしたりすることが出来るものになっていて、面白いんじゃないかなって、だからそれが出来るようなコーディネーターを育てることが出来るような伴走者が、次は必要だと考えます。

ほら、最終報告展の場合、そこがあるともっと知られていくし、わかれば、すごく面白いことがいっぱいあるので、ここでこんなことも出来るのかとか、(会場になった)「コススタなんて昔は東邦銀行だったんだよねって」、でも、東邦銀行だったんだけど、あそこがいろいろなよく撮れる仕掛けがある写真館になっているよって言ったって、まだ、多くの町民は中に入ることがないのです。

「私なんかが入ってて何か面白いんだ」と感じて、も、「上に行くといろんなお花が咲いていて、あんたの遺影の写真なんかあそこで撮ってもらえばつとしていいよ」とか色んな話をするとか「そうなんだ。そこで今こういう発表(ハマカル)の展示)やっているから行ってみない?」っていう風になる。

周知させていくためには、もうどうせ皆わかってもええんだからわかんなくなつていいんだ、じゃなくって、周知させるための方法として、なんか地元とのつながりを使うといいと思うの、色々。

そういうものを伝えていく組織、システムというか、ネットワーク。ネットワークが作られていくと、今やっていることは、けっして無駄でもないし、面白いものが多いところあるのだから、もっとこうわかってもらえる知りさえすれば、興味を持って「何なんだろう」と行くとするんですよ。だから今回、初回の入口だと思うので、これから、地域の中での宣伝マンっていうかネットワークを繋げていけるようなキーマンみたいな人をまちの中に一人と……それは、アーティストでも何でもなくていいから、それを繋げていくっていうような地域コーディネーターみたいなものを置くと、よくなる。

岡田 最後に、ハマカルアートプロジェクトは。ここで創作をしていきたいという芸術家や取り組みたい担い手と、先生がおっしゃられるように文化によるコミュニティの再生にある地元の方々との共創を通じた、他の地域とは異なる創造的発展の可能性を耕

すことにあると考えています。そのために、今後、どのような取り組みが求められるのでしょうか。

青木 先ほど話したように、地元と共創することとは、より繋がっていくことなので、地元と繋がるって誰と繋がんだらう話なんですけど、私は地元の暮らしと繋がってほしいと思います。

なので、単に滞在して何かを作ってっていうことだけじゃなくて地元の人と繋がれるような、そういう繋げるコーディネーターする人、地元とアーティストをコーディネートするっていうそういう風な組織なり、立場なり、そういう個人なり、団体なりっていうのが、開発されて作られていくのが、ハマカルアートプロジェクトの発展には、いいのではないかなと考えます。

自分は何かをしたいと思ってる。何かこうやる、やろうと頑張るっていうのと、そのやろうとしたやってることを地域に繋げていくことは、そもそもが違います。

そこら辺を間違えて、アーティストや担い手の活動だけを支援するのであれば、それは(アーティストや担い手の)自己実現だけで終わってしまいます。

それでは地域に繋がっていかないので、自己実現をしようとしているその人たちとその成果なりそのものを地域に上手く繋げて共創にもっていく人っていう、組み合わせができる仕組みをつくることできれば、もっと地元と繋がって、共創的発展ができるのではないのでしょうか。

青木淑子(あおき・よしこ)

1948年、東京生まれ。1964年、福島県郡山市に移住。福島大学教育学部卒業。1970年～2004年、福島県内県立高校国語科教員・演劇部顧問。2004年～2008年、富岡高校校長。福島県高等学校演劇連盟会長。2012年4月～2015年3月、富岡町社会福祉協議会アドバイザー。2015年4月～富岡町3・11を語る会代表。2017年、福島県富岡町に移住。国際アート&デザイン専門学校声優科講師。日本演劇教育連盟会員。日本演出者協会会員。富岡高校長時代、町との深い連携、町民と関わりがあり、震災後の被災者支援をライフワークとしている。人は人によってしか救われないと実感。どのような状況下でも、いかなる年齢でも、今生きていることに意味があり、必ず、明日に繋がると思えるようなコミュニティを創っていきたくて考えている。

ハマカルアートプロジェクトで生まれる創造的発展

岡田智博

2023年に、福島県の浜通り地域の一部を中心とする12市町村を対象にはじまった、アーティスト・イン・レジデンス（芸術家の中期滞在支援）の取り組み。「ハマカルアートプロジェクト」というタイトルを得て、今回、はじめての実施となった。今回、はじめての実施となった。ハマカルアートプロジェクトは、2011年の東日本大震災に伴う、東京電力福島第一原子力発電所の事故によって長期にわたる避難指示等の対象となった地域において、芸術を通じた、地域の新たな魅力の創出、関係人口の拡大、地域の活力向上などを目的とした、経済産業省の施策の一環として行われたものである。

国や地方自治体による文化政策が、文化芸術基本法をはじめ「文化芸術」の振興を掲げるなか、ここでは「芸術文化」と芸術を主に掲げ、12市町村でのアートの支援に取り組もうとしている。これまで経済産業省は、避難対象地域の解除に伴う支援策として、企業誘致や研究開発の支援という産業振興に多く取り組んできた。その中にあっての「芸術文化」の振興の背景には、地域の魅力の向上を通じた、まちづくりの推進と、地域外からの人の呼び込み（移住・関係人口）、帰還する住民にとってのヘリテージに資する目的がある。それを実行するため、2023年には福島復興推進グループの中に福島文化推進室を新たに設置した。

経済産業省の目的上、これまで「アート」は、産業としての「コンテンツ」、わが国の特色を産業に活かす「クールジャパン」といった、経済に資する支援が中心であった。しかし、福島県12市町村における「芸術文化」の振興事業は、これまでの「アート」を活用した目的と一線を画した取り組みになっている。

「ハマカル」というタイトルを掲げ、はじめての年となった「原子力被災地域における映像・芸術文化支援事業」の取り組みは、わが国にとっても新たな位置をもった「芸術文化」振興策として、どのような可能性をもたらすことができるのだろうか。ハマカル

アートプロジェクトとして、福島県12市町村におけるアーティスト・イン・レジデンスの初年度の仕組みづくりに、補助事業コンソーシアムの一員である、統括ディレクターとして参与してきた立場より、その可能性の射程を照らしていきたい。

地域共創に重きを置いた

アートプロジェクトからの社会関係資本

ハマカルアートプロジェクトが立ち上がった同年、経済産業省のクールジャパン政策課が「アートと経済社会について考える研究会 報告書」（2023年）を発行、文化芸術活動が直接的な経済活動だけではない、社会的なインパクトをもたらすことにより、わが国の経済を伴った発展のエコシステムとして、文化芸術活動が足りうることを提唱した。このエコシステムの大きな要素として、地域でのアート活動がフォーカスされるように、地域での芸術文化活動が地域コミュニティの活性化を通じてさまざまな価値を地域にもたらし得るという理解が、わが国では深まりつつある。

特に、アーティスト・イン・レジデンスが大きな位置を占める、地域でのアートプロジェクト活動は、全国に広がっており、アーティスト・イン・レジデンス事業をわが国に広げた一人であり、2023年のハマカルアートプロジェクトのメンターであった、菅野幸子氏によると100を超えるアーティスト・イン・レジデンス事業が国内で展開している（レビュー③参照）という。

アートプロジェクトとは、社会や地域の中に入り込んで、共創する芸術活動で、芸術としての創作のみならず、社会や地域に新たな価値をプロジェクトが続く限り関係性とともに創出する取り組みである。まさに、芸術家に滞在して、地域の人々と関係しながら創作、すなわち地域住民と芸術家とが共創できるアーティスト・イン・レジデンスは、地域で展開する

アートプロジェクトにとってキーとなる要素となっている。

避難から帰還へと段階が変わった、福島県12市町村において、アートプロジェクトを地元の活性化に活かすためには、地域に芸術家を受け入れられ続けるアーティスト・イン・レジデンスの基盤づくりから必要であった。芸術活動を通じた地域の再生を目的に、富岡町3・11を語る会による演劇活動の場づくり（レビュー④参照）や、2023年のハマカルアートプロジェクトの採択プロジェクトとなった飯舘村の図図倉庫（ズットソーコ）、個人のアートマネージャーとしての富岡町の秋元葉々美氏の活動、同じくハマカルアートプロジェクトでの滞在制作の場のひとつとなった南相馬市小高区の粒粒（ルビ：つぶつぶ）や、休校中の葛尾中学校を拠点とし、村民と芸術家との共創を目指すKatsurao AIRなど、帰還が進むとともに、地域住民や新たな移住者による自発的なアーティスト・イン・レジデンスによるプロジェクトが既に生まれていた。一方で、数多くの芸術家が、特に福島県12市町村での制作を目的に訪問（レビュー④参照）するようになり、これまでの自発的なアーティスト・イン・レジデンス事業が支えてきた熱を絶やさず、地域全体でさまざまなアクターが取り組める環境が、共創性を有した地域社会での芸術文化による持続的発展のための課題であった。

そのため、ハマカルアートプロジェクトは、福島県12市町村において、地域と共創しながら持続的なアーティスト・イン・レジデンスのプログラムを実施する担い手を支援するプログラムとして設計された。すなわち、地域住民と一緒に創作的な場を提供できる担い手（共創できる担い手）が福島県12市町村の各地に展開し、継続して活動できるようにすることで、特定の芸術家が滞りて制作するだけで終わってしまい、本来の目的である継続した地域の活性化が生じないような状況ではなく、地元で取り組んできた担い手が続けることができる支援プログラムづくりに取り組んだ。

細かいことであるが、地域の持続的発展を支援するプログラムとして、最初に取り組んだのは「ハマカル」という名称づくり。「原子力被災地域における映像・芸術文化支援事業」という正式名称では、せつかくの創造的取り組みや成果としての展覧会、

映画上映があっても、それがどういうことなのか一貫して認知されることは難しい（「ハマカルアートプロジェクト」においては、「地域経済政策推進事業費補助金（芸術家の中期滞在制作支援事業）」と、親しんでもらいたい取り組みなのに説明がとても難しい名称になっていた）し、そもそもとても伝わりにくい。ブランディングというか、これを簡単に話せる名称になったら、地域でも全国でも認知は深まるし、「ハマカルだよ」「ハマカルやっている」ということとして浸透していく。この「原子力被災地域における映像・芸術文化支援事業」に携わっているのは、経済産業省全省から募った若手を中心とする職員たちで、「ハマカル」の名称も、地域上一概に「浜通り」とひとくくりにできないが、浜である地域を中心とした地域を文化（英語ではculture）で耕す（英語ではcultivation）を組み合わせ、誰もが親しめる語感と想起できるものとして、彼ら彼女たちが考案した名称である。

このように、地元としての福島県12市町村と関係する人々の輪を芸術と文化を通じて厚みのあるものにしていくためには、アートプロジェクトがわが国で広がる発端となった現代アートの分野にとどまらない、幅広い文化的創作を地域で受け入れられるプログラムであることが必要となる。多様化するアーティスト・イン・レジデンスのプログラムにおいては、映画制作や演劇など、現代アート以外を扱うプログラムも生まれ始めているが、多くの場合表現分野が限られている。本プロジェクトでは、多様なアーティスト・イン・レジデンスのプログラムが豊かに花開く土壌になることが目的となるため、どんな分野のプログラムでも実施できるようにした。当初は、映画、演劇、現代アートの3分野を主軸に打ち出してきたが、公募の際には、それ以外のあらゆる分野を関係するとして、結果として、ボイスドラマや建築、デザインといった、現代を表象する多彩な滞在制作が選ばれ、実施（詳しくは本事業アーカイブの成果紹介を参照）された。

幅広い分野設定は、ともすれば、本来の目的である、芸術文化活動を通じた地域住民との共創と関係を発展的に持続させることと矛盾するリスクもある。たとえば、映画等の映像制作の場合、現地での創作が終われば、創作としての関係は断絶してしま

う。音楽の場合も演奏だけで終わってしまうことも多い。現代アートであっても、そこで題材を得て終わりということもある。ハマカルアートプロジェクトでは、個々の滞在作家の活動の持続性というよりも、アーティスト・イン・レジデンスのプログラムを実施する事業者（担い手）がどのように、地域との共創を行ない、持続的なプロジェクト活動に取り組めるのかを基準とすることで、本来の意義である、地域で多彩なアートがつくり続けられる環境づくりを支援できるようにした。

結果として、先にあげた既に自らの手でアーティスト・イン・レジデンスに取り組んでいる地域のプロジェクトをより発展させる取り組みや、被災にあった伝統的工芸品の工房施設を滞在制作や企画展示の場として再興したガッチ株式会社の浪江町での成果など、制作支援を継続できる新たな関係性の構築を実現できた地域内外の担い手が生まれる一方、地域との共創により作品成果が生まれるながらもその関係の継続によるプログラムづくりを模索する地域外の担い手も存在することは確かである。

また、アーティスト・イン・レジデンスに取り組んだ担い手だけでなく、同じく、狭い分野にとどまらないアートによる地元の担い手との継続した事業活動の広がりも生まれた。富岡町出身で帰還を果たした若い起業家が旧銀行をコンバージョンして起業した、コスプレスタジオ機能を持つ写真館「コスタ」は、2023年度の成果報告展の会場となり、アートを含めた創造の場としての広がりにより多くの地域住民が新たな期待を寄せるようになった（レビュー④参照）。2023年に100周年を迎えた南相馬市原町にある今でも上映が可能な旧映画館の朝日座では、地元経営者が中心となった再興活動が、ハマカルアートプロジェクトにおける滞在制作の受け皿となり、多分野のコンテンツが展開した。葛尾村のアーティスト・イン・レジデンス・プログラムのチームが、滞在制作事業の多くの部分で専門的技術等の提供を行なった。

はじめてのハマカルアートプロジェクトであったこともあり、これらの活動を支援するコンソーシアムの事務局もまた、新たな取り組みを経済産業省の職員たちと耕す一年であった。そのため、支援する担い手とともに動いていくながらのプログラムづくりと

なった。動くことで共創関係が地域で生まれていく、全く地域との接点が無かった担い手が、人材育成において世界的に評価を持つハンガリーの映画監督であるタル・ペーラ氏を迎えて、世界公募で選んだこれからの才能を持つ7人の監督が2週間の滞在で福島県12市町村を舞台にそれぞれの映画制作に取り組んだプログラムが実現できたことは、初年時における共創の「開墾」成果といえるであろう。一方で、幅広いプログラム、異なるバックグラウンドの担い手間の連携が十分でなく、それぞれのプログラム間の交流が限られたものになってしまったことが、支援を受けた担い手の多くから指摘されたり、また、富岡町3・11を語る会の青木淑子代表が指摘（レビュー④参照）したように、地域で活動をしたり、同じく芸術文化活動を福島県12市町村にて求めている担い手との関係性の構築がまだ途上にある点は成長課題である。

アートプロジェクトの担い手、滞在芸術家、地域住民、地域と関係する人々の共創の結果、実際の創作活動に触れた人々の間から、福島県12市町村における芸術文化活動をより広げていく、実施していくための、関係性も生まれ始めている。成果展示の会場となった「コスタ」からのつながりのように地元在住の若手起業家や、レビュー④で語った地元と密着した担い手である富岡町3・11を語る会と一緒にあったアウトリーチなど、アートに関わる人々ととどまらないハマカルアートプロジェクトの輪が芽生えつつある。「ハマカル」の愛称とともに広がる、実際に触れた人々が広げる関係性は、同じく「ハマカル」の取り組みから2023年に生まれた、地域での映画制作の支援プラットフォームである「相双フィルムコミッション」の活動など、多分野の芸術文化活動で価値を創造できる「ハマカル」地域へと共創しながら、芽吹くことが期待できる。

ハマカルアートプロジェクトが耕す 共創環境による競争力のある 創造的まちづくりの可能性とその条件

このように、多数のアーティスト・イン・レジデンスのプログラムを地域で展開できる環境がハマカルアートプロジェクトを通じて、生み出されている「芸術

家と地域住民との共創」によって、これからどのような価値を生み出す可能性があるのだろうか。

ここで着目したい点は、新産業地域の創出と再生において、1990年代以降世界のスタンダードとなってきた政策アイデアである「創造都市」の流れにとっても親和性が高い要素が、福島県12市町村における「ハマカル」の取り組み、特にハマカルアートプロジェクトに有する点である。

創造都市は、PCの普及によるデジタルを活用した知的生産活動の「民主化」（特別な装置によらずとも、集団や個人の範囲でデザインや設計、動画制作等を可能とした）と、コミュニケーションの高度化によるパーソナルなネットワーク化、それに伴って大企業や制度的寡占に対してビジネス面においてローカルが対抗できるようになったことが、高度情報化ネットワーク社会の到来によってもたらされた結果、地方都市に住む人々や若者であっても自身の創造性で新たな営みをつくることのできる環境がもたらした地域産業のエコシステムを指す。

このような、知的生産活動の「民主化」は、デジタルやメディアコンテンツに関係する分野においてこれまで辺境とされてきた都市から新たな創発を生み出し、有力なスタートアップやクリエイターを輩出し、食や化粧品等の分野においてはグローバル企業のブランドに対して地域資源を活かした製品が市場を獲得し、これらの活動が行き来する衰退した中心市街地や工業地帯が魅力ある文化体験をたのしむ観光地へと変貌を遂げた状況を通じて生まれた概念である。デジタルやメディアコンテンツ分野においては、フィンランドのヘルシンキやオランダのアムステルダムが好例であり、食や化粧品、観光の分野においてはイタリア北部の諸都市、ビルバオやサンセバスチャンといったスペインのバスク地方がよくあげられている。東アジアにおいても、無人の港湾地域のアトリエやレジデンス、展示の場への転用を発端に、500万人を年間集める地域有数の観光地でありクリエイティブ産業の中心へと変化を遂げた台湾の高雄のような事例がある。

創造都市のアイデアは、都市産業政策もしくは文化振興政策において、世界的に広がっており、このような環境から生まれた、知的産業分野は創造産業（クリエイティブ産業）として数多くの国々や無数

の地域で最新の産業として振興に取り組まれているようになっている。

創造都市において成功している地域に共通するものとして、新たな表現を受容し、さまざまな場所で表現や展開ができる、進取性と寛容性、それを実現する無数のネットワーキングやコミュニティの存在と、これらを結びつける多様な触媒（ミッドグラウンド、中間支援）の存在がある。すなわち、地域住民と創造的な人々との間に、多様なつながりが存在し、そのことによって双方が地域で関わりあいを持てる共創関係が幾つも存在し、その多様性が刺激となって魅力ある地域を、担い手自身の手によって生み出されている状況が存在している。

はからずも、ハマカルアートプロジェクトが目指そうとしている、地域住民と芸術家、クリエイター等の創造的な人々が、さまざまなプログラムを地元でつくる担い手によって、多様な関係を通じた豊かな共創環境をつくり出そうとしていることとつながっている。

この創造都市の考え方は、ある程度以上の人口規模だけではなく、人口が少ない地域でも存在しているという考え方が、主流となりつつある。経済地理学者のリチャード・フロリダ博士は、全米の地域統計をもとにIT産業の成長と創造的傾向のある人材の多さの相関は人口の大小を問わず起きることを明らかにし、わが国においては創造都市のアイデアをアジアにはじめて導入した佐々木雅幸博士が「創造農村」というアイデアを創出し、人口が少ない地域においても地元住民と創造的人材との間の共創による地域社会や経済の発展があることを示している。

現在、創造農村の考え方において、好例とされているのが徳島県神山町である。山間にある神山町では、当時、若手であった地元経営者たちが、国際交流の一環としてアーティスト・イン・レジデンスのプログラムを開始したことで、創造的な人々との関係が深まり、そのことが当時では移住をめぐる障壁のひとつとして全国的な課題となっていた空き家活用をしやすくする（ほかの地域では簡単に出てこない活用可能な空き家が、神山町ではつながりと担い手の信頼によって容易にでてくる）取り組みや、若手建築家によるリノベーション、「イン・レジデンス」形式（滞在してさまざまなテーマの働き方ができる）



等によって、移住先、テレワーク先として、全国の中から選ばれる地域へと変貌を遂げた。地域住民が、アーティスト・イン・レジデンスの経験をノウハウとして、地域外の創造的な人々と共創する担い手となることで、移住者に選ばれ、多くの創造的な人々の関係が生まれ、東京など大都市の企業や起業家が創造的な活動をするための事業所を置き、このような創造的人材の育成のための高専の設立など、社会的投資を呼び込み続けている。

神山町における共創のための中間支援組織であるNPO法人グリーンバレーの設立者でもある、地元経営者で同地の創造的地域づくりのリーダーである大南信也氏によると、創造農村としての神山町は創造的過疎を目指すという。すなわち、既存の過疎化を受け入れながらも、新たに創造的人材が移住や関係を持つことにより、新たなまちづくりの成長を果たしていこうという考え方である。まさに、地域住民が積極的に創造的な交流が親しめ、そのことで外部から人々を受け入れ、そのことで時代に応じた創造的発展が実現できる地域づくりの姿がある。

大南氏によると、創造的過疎において、アートプロジェクトを通じてどれだけの観覧者が集まってきたというのを、評価に置いていないという。アーティスト・イン・レジデンスは、観光誘客を目的としたものでなく、あくまで創造的な人々との新たな関係の機会であり、その結果、作品が里山に増えることは、町の文化を豊かにする財産であるという。関係したいと神山に集まってくる人々は、アーティスト・イン・レジデンスの成果である作品と触れることで、この地が創造性において豊かであることを確認し、同じく、町の人々にとっても実感できるヘリテージとなる。

プログラムの実施による表面的な動員数等の結果を追うのではなく、ジャンルを異にする多様な人の出会い、そこで展開される体験の共有というプロセスの中から想像を超える創造や新たな価値が生まれているといった、共創の積み重ねが今の神山であると、大南氏は語る。

アーティスト・イン・レジデンスを通じて、神山に触れた人々が地域住民に相談し、新たなことをはじめていく。相談から一月もたたないうちに、スタートアップの開発センターが古民家にできる、海外からのレジデンス作家がクラフトビールを醸造し、起業する。

そうすることが、日常のなかで起こっている創造農村なのだ。

最初のハマカルアートプロジェクトの中間報告会において、メンターとして来訪した大南氏の目には、福島県12市町村の地域において、同じく可能性を感じられたという。創造的な可能性をもって、さまざまな人々が関係する「ハマカル」地域の環境は、地域住民との共創環境をつくり出していくことによって、外から人々が集まり、発展する可能性がある。それは、富岡町において地元で展開するアート活動の魅力を地域住民に伝える役割の重要性を自らの経験で取り組み、ハマカルアートプロジェクトにおける共創を高める課題だとする青木代表の指摘ともつながる。

まだ、なにが起ころかわからない段階にあって、全国からのべ67事業者が応募をし、14事業者が取り組んだ、最初のハマカルアートプロジェクト。福島県12市町村で、芸術表現による創造的活動に取り組みたい人々が多いことを反映する一方、採択された支援事業者だけではなく、関係したい多くの創造的な方々に、そして、そのことによって共創の価値が生まれる地元の方々やさまざまなかたちで関係できることで、たくさんの創造的価値が生まれるような、地域になることが射程にみえる。

この射程において、アートプロジェクトを通じて生まれる成果は、全国や世界で行なわれているような地域で芸術作品や表現を展示する大規模芸術祭のような、一過性の観光等による誘客を求めるものではない。それよりも、初回における多くのアーティスト・イン・レジデンスの成果が示したような、芸術家との関係性を通じて、日常的な行き来を伴った関係が構築され、その結果、さまざまな営みが生まれ、続いていくことに価値がある。

たくさんのアートプロジェクトの連続性と、そこから生まれる新たな営みに惹かれ、日常的に福島県12市町村に訪問する、そして、自らも営みの一員になっていく。そんな、神山町で起きているような日常と重なる光景が生まれることこそが、射程の向こうにある成果のビジョンなのだ。

そのためには、アーティスト・イン・レジデンスを担う事業者が、ハマカルアートプロジェクトとしての補助事業にとどまらない、共創を地域で続けていける

ようにすることが求められる。プロジェクト全体を統括する私たちにとっては、いかに福島県12市町村における共創関係を誘発し、プロジェクト外にまで継続的に波及させることができるかが求められる。それは、統括する私たち、だけではない実際の取り組みを通じて、共創がみえてきた地域におけるさまざまなアクターもまた、私たちとなっていく、ハマカル的創造環境へと土壌を豊かにしていくことでもある。

岡田智博(おかだ・ともひろ)

ハマカルアートプロジェクト2023統括ディレクター。
一般社団法人クリエイティブクラスター代表理事。
東京藝術大学教養教育センター コーディネーター。
博士(学術)。マルチメディア→IT革命初期より、文化芸術から生まれる創造性による社会イノベーションの可能性に着目、スタートアップ支援や地域での新産業政策に各地で携わる。一方で、テクノロジーアートの普及活動に携わってきた。文化庁メディア芸術祭地方展のディレクターを3地域で務めるなど、アートを先端的に活用した地域共創づくりを数多く手がけている。最近の取り組みとしては、2022年の欧州文化首都ノビサド(セルビア共和国)での日本の現代美術を通じた未来予測をテーマにした展覧会のキュレーションや、東京都の山間部である西多摩地域でのアートを通じた地域住民との魅力づくりプロジェクト「あきがわアートストリーム」のディレクション、東京藝術大学での初年次教育プログラムの開発に携わっている。



あわせてご覧ください

プロジェクト実施中のレポートをnote(WEBサービス)で公開

ハマカル・アート・プロジェクトに参加した、プロジェクトの担い手や滞在芸術家が福島でどのような活動をしたのか。実施期間中の活動を、現地で活動するローカルプレスのチームが同時取材しました。そのレポートをnote(WEBサービス)を通じて公開しています。どのような活動や交流、共創が展開されたのか、もうひとつの記録です。

ハマカルアートプロジェクト

<https://note.com/hamaculartproject/>

noteの記事より



【プロジェクト紹介】『アートと考古学国際交流研究会実行委員...

全国・世界・地元から、福島県12市町村に、芸術家が集まり、滞在制作をするハマカルアートプロジェクト...

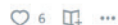
ハマカルアートプロジェ...
1日前



【アーティスト紹介】株式会社経宮芸術総合研究所〜新たな試みで...

全国・世界・地元から、福島県12市町村に、芸術家が集まり、滞在制作をするハマカルアートプロジェクト...

ハマカルアートプロジェ...
2日前



【採択者紹介】リジョイス企画〜『音楽が日常にある風景の創造』...

全国・世界・地元から、福島県浪速町12市町村にて芸術家が滞在制作をする「ハマカルアートプロジェクト」...

ハマカルアートプロジェ...
2日前



【福島映画教室】山田洋次監督と犬童一心監督のマスタークラス i...

全国・世界・地元から、福島県12市町村に、芸術家が集まり、滞在制作をするハマカルアートプロジェクト...

ハマカルアートプロジェ...
2日前



【採択者紹介】株式会社経宮芸術総合研究所〜新たな試みで捉える...

全国・世界・地元から、福島県12市町村に、芸術家が集まり、滞在制作をするハマカルアートプロジェクト...

ハマカルアートプロジェ...
2日前



【プロジェクト紹介】『アートと考古学国際交流研究会実行委員...

全国・世界・地元から、福島県12市町村に、芸術家が集まり、滞在制作をするハマカルアートプロジェクト...

ハマカルアートプロジェ...
2日前



はじめてのハマカルアートプロジェクト ハマカルアートプロジェクト2023 アーカイブ

編者： 岡田智博

デザイン： ナカノケン (Alphayz)

製作： ハマカルアートプロジェクト2023コンソーシアム

(株式会社アドギルド・ジャパン、一般社団法人クリエイティブクラスター、合同会社tecoLLC)

発行日： 2024年3月

発行： 一般社団法人クリエイティブクラスター

東京都西多摩郡檜原村4258 アーツキャンプひのほら 〒190-0205

メール tokyo@creativecluster.jp

アーカイブURL <https://hamacul.creativeclusters.jp/>

補助： 経済産業省 令和5年度 地域経済政策推進事業補助金

本書の無断転写、転載、複製を禁じます

